

令和6年度

研究 ゆり

＜研究主題＞

学びたい気持ちを高め

夢中になって取り組む姿を目指した授業づくり

ーキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の活用を通してー
＜1年次/2年計画＞



巻 頭 言

本校では昨年度まで「『児童生徒が学びをつなぐ』教育課程の編成」に2年間取り組んできました。その中で、児童生徒の学びの実情を振り返った時、本当に本人の「○○したい、○○を学びたい」という気持ちを十分に汲み取り、生かし、本人主体の学びになっているのだろうかという疑問が立ち上がってきました。そこで、新たな研究に当たっては、児童生徒の思いや願いを大事にした授業づくりに焦点化し、「学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を目指した授業づくり」をテーマに、2年間取り組むことにしました。

そもそも児童生徒主体の「思い・願い」を汲み取ることは、決して容易なことではありません。そこで、本校で作成しているキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」を手掛かりとすることとしました。この「未来へのスケッチ」は、一人一人の願いを明確化し、学びの足跡を見える化しながら自己理解を深めるツールです。これを有効活用することで、児童生徒自身の学びに対する意欲を喚起し、自分のしたいこと・興味のあることに取り組める題材や学習内容を授業で実現したいと考えました。

自分自身を振り返ってみると、機械的に教え込まれる「我慢の授業」ほどつまらないものはありません。私たちが目指したいのは「児童生徒が主役の学び」です。とにかく教師が設定した学習課題が先行し、教師主導になりがちな意識を改め、今一度児童生徒の思い・願いをしっかりと受け止め学習内容に反映すること、構成や支援を工夫すること、そして児童生徒自身が学びの手応えや成長を感じることで、自信をもち、さらなる学びの意欲につながっていく、そんな好循環を目指したいと考えます。「何が始まるんだろう?」「なぜだろう」「おもしろい」「挑戦してみよう」「できるようになった」「もっとやりたい」等、瞳が輝き、心と体が動き、夢中になって生き生きと取り組む姿が随所に見られる授業は、教師自身の手応え・意欲にもつながります。双方向のエネルギーの相乗効果が発揮できる魅力的な学びが実現できたら、どんなに素晴らしいことでしょう。一朝一夕には実現できませんが、本研究の成果が我が校のスタンダードになるよう、教師自身も変容を楽しみながら取り組みたいと思います。

結びになりますが、今年度も年3回全校授業研究会を公開で実施し、県内外からオンラインも含め多くの方に御参加いただき、たくさんの御意見・御感想をいただきました。御多忙の中にもかかわらず、事前研究会も含めて何度も本校に足をお運びくださり貴重な御助言をいただきました、秋田大学教育文化学部名誉教授 武田篤先生、秋田大学大学院教授 藤井慶博先生、秋田大学教育文化学部教授 前原和明先生に心より感謝申し上げます。

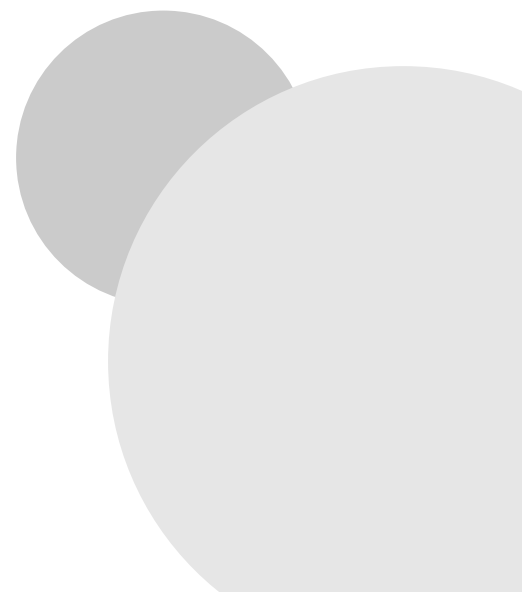
令和7年3月
秋田県立ゆり支援学校
校長 近藤 千晴

◇ 目 次 ◇

<巻頭言>	校 長 近藤 千晴
○研究の概要	1
「学びたい気持ちを高め夢中になって取り組む姿を目指した授業づくり ーキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の活用を通してー	
○授業づくりの実際	
小学部	9
中学部	15
高等部	21
寄宿舎	27
○研究のまとめ	33
研究の歩み	36
研究同人	37



第1章 研究の概要





研究主題

学びたい気持ちを高め、夢中で取り組む姿を目指した授業づくり

～キャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の活用を通して～(1年次/2年計画)

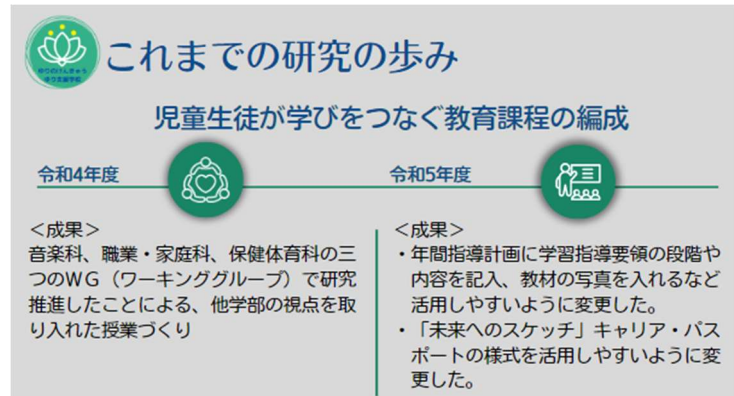
1 研究主題設定の理由

(1) これまでの研究の歩み

本校では、令和4年度から研究主題を「児童生徒が学びをつなぐ教育課程の編成」として研究を進めてきた。「児童生徒が学びをつなぐ」とは、児童生徒が学習内容に見通しをもったり、学んだことを活用し、次の学習へ生かしたりしている状態を指している。児童生徒が学びをつなぐために、教師は学びをつなげるための具体的な

言葉掛けや学んだことを家庭と連携したり、教室へ掲示したりするなど支援の工夫を行ってきた。さらに令和5年度は学部の授業を中心とし、児童生徒が学びをつなぐために、年間指導計画やキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の様式を、活用しやすいように変更しながら実践研究を推進した。研究を進める中で、教師は児童生徒が目標を設定したり、適切に評価を繰り返したりすることの大切さ、学校、家庭、寄宿舎と連携して児童生徒のできたことや成長したことを認めるとともに、児童生徒の自己理解を育んでいく必要性などについて深めることができた。

また、本校では令和2年度からキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」を中学部・高等部が作成し、令和3年度から小学部が作成し始めた。将来の夢を記入し、学期ごとに振り返りを行ったが、様々な実態の児童生徒がいる中で一つの様式に記入することの難しさ、記入したことを意識しながら生活することの難しさ、面談の時間を設ける大変さなどがあり、活用していくことに課題が見られた。そこで、令和5年度は中学部で「未来へのスケッチ」の様式を変更し、月ごとに振り返りや目標を設定し、生徒が自分を振り返る時間を設けた。家庭にコメントを依頼し、振り返りを積み重ねることで、新たな目標を設定したり、そのために日々の授業や家庭で何を頑張るなど具体的に考えたりして、学校や家庭の生活を見直すきっかけとなった。小学部では、教師と決めたことを記入するだけでなく、「イラストや絵を使って簡単に作成したい」高等部では「現場実習や作業学習の目標などとリンクして作成できるようにしたい」など、児童生徒が活用しやすい様式のアイデアが出された。また、職員同士でも日常的な会話の中において「未来へのスケッチ」という言葉が聞かれるようになり、生徒も「未来へのスケッチ」に目標を記入したりすることが定着しつつあり、学校の教育活動や授業とつなぎ、どのように活用していくべきか考える段階になってきた。



(2) 令和5年度の成果等

令和5年度の成果と今後に向けては以下のとおりである。

<令和5年度の成果と今後に向けて> ○成果→今後に向けて

児童生徒が学びをつなぐ授業づくりのポイント

- 活動内容や学習展開の工夫をして興味・関心の幅を広げる。
- 校内人材を活用し、第三者からの評価で自信につなげる。
- 学んだ履歴を視覚的にまとめて掲示、振り返りの時間を確保する。
- 卒業後を見据え、地域資源を活用し、学校全体に学びをつなげる。

児童生徒の学びをつないだ姿や変容

- 学級への所属意識が高まり、約束やルールを守ろうとするようになってきた。
 - 教師が児童同士をつなぐ言葉掛けをしてきたことで、意見をまとめたり、友達の意見を聞いたりするようになってきた。
 - 1か月ごとに目標設定と振り返りを積み重ねたことで、目標や夢について自分ごととして考えられるようになってきた。
 - 夢や希望を叶えるために努力し、今の頑張りが卒業後につながることを実感できるようになった生徒が増えた。
 - 生徒が自分の得意、不得意に気付き、前向きに取り組んだり、将来の進路について考えたりする機会が増え、自己理解につながったり、自己理解を深めたりすることができるようになってきた。
- 「未来へのスケッチ」を授業にもっと活用したい、保護者や寄宿舎と連携したい。
- 児童生徒の思いや願いを大切にしつつ、授業の中に取り入れ、児童生徒の学びをつなげたい。

また、令和5年度の研究のまとめでは、児童生徒の学びをつなぐために三つの提言が挙げられた。

- ・児童生徒の思いや願いを反映される授業づくり
- ・児童生徒の実態に応じて「未来へのスケッチ」を活用し、振り返りや自己評価、他者評価ができる仕組みづくり
- ・学部間の「学びの連続性」やキャリア教育の視点も考慮した教育課程の見直し

令和5年度の研究実践を通して、教師は「未来へのスケッチ」を日々の指導に生かしたり、児童生徒の目標や夢を達成するためのツールとして活用したりしながら、少しずつ授業づくりにも取り入れることができた。「未来へのスケッチ」を作成するに当たって大切なことは、教師が児童生徒との日々の対話を通して目標や夢を聞き取り、共感的な姿勢で関わることである。また、そのやり取りの中で、児童生徒の「〇〇したい、〇〇をやってみたい」などの思いや願い、学びたい気持ちをくみ取りながら、授業に生かすことが教師の専門性として必要なことであると考えられる。本校の授業づくりを見たときに、教師主導で授業を進めてはいるか、児童生徒が学びたい気持ちを高められるような単元設定になっているかなど、必ずしも児童生徒が夢中になって取り組む状況が設定されていないように思われる。児童生徒が学びたい気持ちが高まるように授業を工夫することで、主体的な学びにつながったり、もっと学びたいと夢中になって取り組んだり、児童生徒自身が学んだことや自分の成長をより実感したりするのではないかと考える。また、教師の授業に対する意識も、教えるのではなく子どもの視点にたって授業づくりをするようになってきた。

(2) 社会的背景

2019年1月の文部科学省「キャリア・パスポート」導入に向けた調査研究協力者会議では、「小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。教師にとっては、その記述をもとに対話的に関わることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの」とされている。また、学習指導要領特別活動解説において「『キャリア・パスポート』とは、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返った

社会的背景

<2019年1月「キャリア・パスポート」導入に向けた調査協力会議>
児童生徒は自己評価を行い、主体的に学び、自己実現に向けて力を育む。教師は、対話的に関わる必要がある。

<学習指導要領特別活動解説>
『キャリア・パスポート』は、教育活動におけるポートフォリオである。自己評価や成長を促進することを目的とし学習状況やキャリア形成を記録する。教師の対話的支援を通じて、児童生徒の成長を促し、学校、家庭、地域での学びをキャリア形成に結び付ける。

教師との対話により、児童生徒が新たなことに気付き、思いや願いを表出し、「未来へのスケッチ」を授業に活用できるものにしていきたい。

りしながら、自信の変容や成長を自己評価できるように工夫されたポートフォリオのことである。なお、その記述や自己評価の指導に当たっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばし指導へつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うように努めなければならない。」とされている。

このように、学校においてキャリア・パスポートを作成し活用していくことが求められているが、特別支援学校では、様々な実態の児童生徒がいる中で、キャリア・パスポートをどのように学校生活や家庭生活、授業に生かしていくかが課題である。

そこで、これまでの研究の取組や社会的背景を踏まえ、本年度の研究主題として「学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を目指す授業づくりーキャリア・パスポート「未来へのスケッチ」の活用を通してー」と設定した。

2 研究の目的

令和5年度までの研究で、児童生徒が学びをつなぐために必要な方策を検討して授業実践を進めてきた。学びをつなぐためには第三者からの評価で自信につなげる、学んだ履歴を視覚的にまとめる、卒業後の生活を見据えて地域資源を活用するなど授業づくりのポイントを導き出すことができた。しかし、児童生徒自身の、「〇〇したい、〇〇を学びたい」という声を聞き取り、子ども主体の学びを重視しながら、年間計画や学習の展開をしていたかどうかを振り返ると、必ずしも十分な対応ではなかったものと言える。

このことから、児童生徒の興味・関心について教師が見取ったり、児童生徒の思いや願いを聞き取ったりしながら、授業実践を行うことが、児童生徒の学びたい気持ちを高めるとともに、児童生徒主体の学びにつながり、様々なことに前向きに挑戦し、夢中になって取り組む姿につながるものと考えられる。

また将来の生活を見据えると、学びの成果や成長について保護者に知ってもらうことが不可欠であり、学校が家庭と連携して取り組むことが必要である。

学校や家庭、社会をつなぐツールである、キャリア・パスポート「未来へのスケッチ」を活用した授業づくりに焦点を当てて、実践研究に取り組んでいきたい。



3 研究の内容と方法

上記の目的を達成するために、2年計画で以下の内容と方法を設定した。

(1) 令和6年度

①児童生徒が学びたい気持ちが高まるような題材設定や単元づくりの工夫

- ・児童生徒の（もっと〇〇をやりたい、〇〇を調べたい、〇〇を知りたい、〇〇に行きたい）など、自ら進んで学びたい気持ちが高まるような題材設定や単元の工夫をし、主体的に取り組む姿を目指した授業づくりをする。
- ・年3回（5月、8月、1月）の全校縦割り授業ミーティングを実施し、他学部の視点から意見をもらい、年間指導計画の検討、単元や題材検討、授業内容の検討、児童生徒の変容の共有などをする。

②「未来へのスケッチ」の活用と、児童生徒の学びたい気持ちを大切にした実践

- ・学部ごとに児童生徒の実態に応じた「未来へのスケッチ」の様式や活用方法を検討し、児童生徒の思いや願いを書き込んだり、自分の学びを蓄積し、振り返ったりできるようにする。
- ・児童生徒の思いや願いをくみ取り、主体的に学びたいと思えるような授業の工夫をし、事例対象児童生徒の変容を検証する。

③保護者と連携して取り組むための仕組みづくり

- ・「未来へのスケッチ」を何のために作成するか保護者に周知し、連携について依頼する。
- ・保護者面談で活用し、保護者と共に「未来へのスケッチ」を作り上げていく。
- ・小学部、高等部は学期毎の年3回、中学部は1か月毎に「未来へのスケッチ」の保護者欄に記入してもらい学校と家庭の連携を図る。

④「未来へのスケッチ」作成から教育資料作成までのシステムの構築

- ・児童生徒との「未来へのスケッチ作成」の面談から思いや願いを聞き取り、年間指導計画、個別の教育支援計画、個別の指導計画作成、授業づくりまでのシステムを構築する。

(2) 令和7年度

①学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を目指す授業実践

- ・年間指導計画や授業計画に児童生徒、教師、保護者の思い・願い（教育的ニーズ）を反映した授業づくりが機能しているか検証、改善する。
- ・年3回（5月、8月、1月）の全校縦割り授業デザインミーティングを実施し、他学部の視点から意見をもらい年間指導計画の検討、単元や題材検討、授業内容の検討、児童生徒の変容の共有などを通して、児童生徒の思いや願いに即した授業の展開を意識できるようにする。

②「未来へのスケッチ」のさらなる活用

- ・児童生徒が学びを実感し、振り返ったり、目標を設定したりするものとなるように、様式や記入方法、掲示方法などを工夫・改善し、授業づくりに生かす。

③児童生徒の変容の見取り

- ・エピソードから児童生徒が学校、家庭などでどのように変容したかを見取り、必要に応じて改善する。

④「未来へのスケッチ」作成から教育資料作成までのシステムの構築

- ・令和6年度の課題や改善点から教育資料作成までの問題点を修正し、授業づくりまでのシステムを視覚化して取り組む。

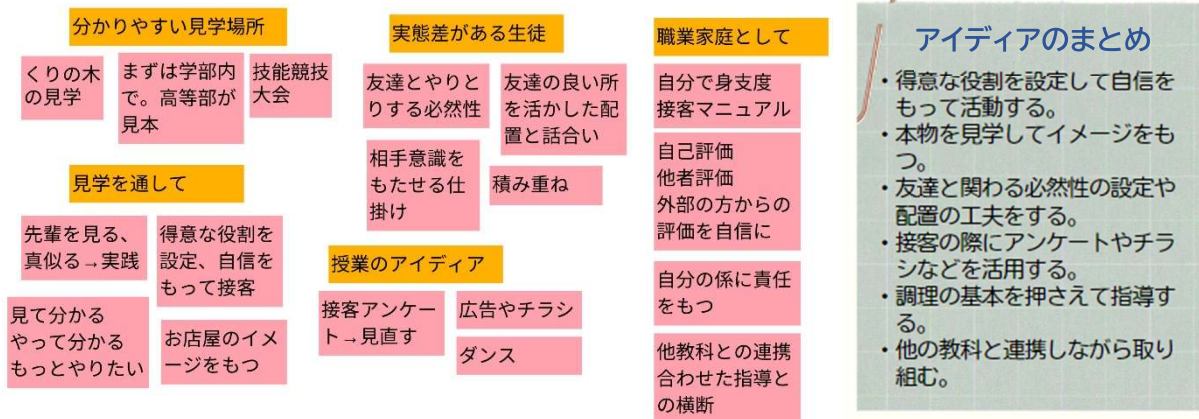
4 研究の実際

(1) 児童生徒が学びたい気持ちが高まるような題材設定や単元の工夫

年3回（5月、8月、1月）に全校縦割りでの授業デザインミーティングを実施し、全校授業研究会と学部授業研究会の授業について単元・題材検討や授業内容、児童生徒の変容などを検討、共有する機会とした。研究対象授業について授業デザインミーティングを行い、児童生徒の思いや願い、「未来へのスケッチ」からどのように授業づくりをするかなどについて検討、情報を共有した。

5月	児童生徒の思いや願いを基にした年間指導計画、単元・題材検討
8月	授業内容評価・改善 児童生徒の変容を共有
1月	児童生徒の変容共有 次年度に向けての提言

< 中学部2年 生活単元学習 >



【授業デザインミーティング1回目で話し合われた内容】

(2) 「未来へのスケッチ」の活用と、児童生徒の学びたい気持ちを大切にしたい実践

今年度から、各学部が児童生徒の実態に応じて工夫した「未来へのスケッチ」を活用し、授業づくりに生かすようにした。児童生徒の「思いや願い」を聞き取り、授業や日々の学校生活に反映している。今年度から新たな取組をした「未来へのスケッチ」については以下のとおりである。

(学部ごとの「未来へのスケッチ」)については、各学部の研究の実際を参照)

<小学部> 学年の実態に合わせて様式を工夫した。小1では、好きになったこと、できるようになったことを教師が見取り付箋紙に書いて貼り付けていく取組をした。

<中学部> 生徒との面談をして、生徒が1か月で「できるようになったこと」を付箋紙に記入し、可視化する取組をした。

<高等部> 「未来へのスケッチ」の目標記入について状態目標（理想とする未来）行動目標（ゴールに近付くための目標）結果目標（ゴールを具体的に示した目標）の3つに分けて記入するようにした。

* 状態目標とは・・・

理想とする将来を状態目標という。モチベーションにつながるような、ワクワクする目標を設定する。

* 結果目標とは・・・

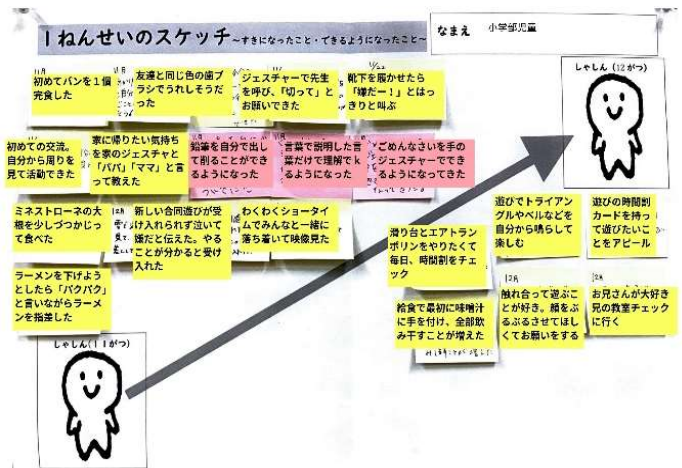
達成したいゴールや得たい成果を、具体的かつ明確に示した目標が結果目標となる。広く理想を掲げる状態目標に対し、結果目標は具体的なゴール地点を示す。

* 行動目標とは・・・

具体的な行動が伴う目標が行動目標とする。いつまでに・何を・どれくらい行動するか、細かく組み込む。混同しやすいが、「ゴール」となる結果目標に対し、行動目標は「ゴールに向かうためにすべきこと」を設定する。

<小学部「1年生のスケッチ」作成方法>

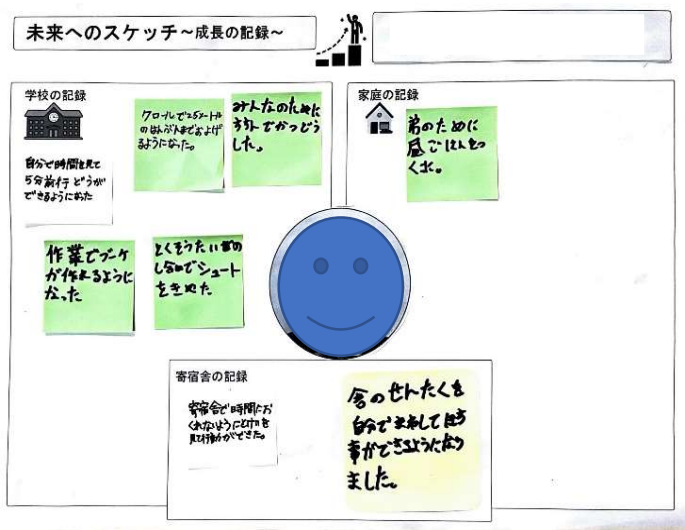
- ・用紙は1か月ごとに新しいものに更新する。
- ・担任が学校生活の中で見つけたエピソードや成長が見られた場面を付箋紙に記入して貼る。
- ・家庭での成長や変容は連絡帳などを通して聞いたことを付箋紙に記入して貼る。
- ・普段の児童の様子をよく観察し、家庭と連携しながら作成を進めていく。



【小学部 1年生のスケッチ】

<中学部3年「未来へのスケッチ」成長の記録作成方法>

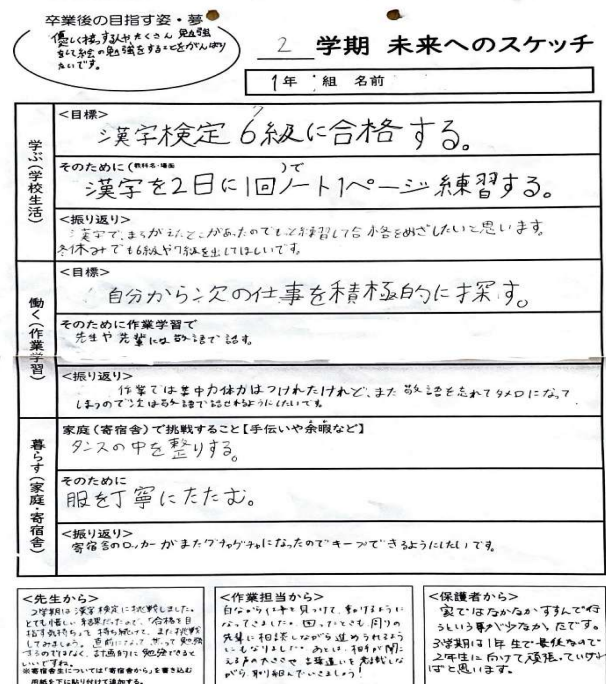
- ・毎週金曜日の4校時に振り返りの時間を設定する。
- ・頑張ったこと、困っていること、家庭や寄宿舎での出来事、次にこ頑張りたいことなどの項目に記入し、担任との対話を通して1週間を振り返る。
- ・月末に「未来へのスケッチ」の評価をし、翌月の目標を記入する。
- ・1か月の中でできるようになったことや成長したことなどを1つ選び、付箋紙に記入して「成長の記録」に貼る。



【中学部3年「未来へのスケッチ」成長の記録】

<高等部1年「未来へのスケッチ」作成方法>

- ・卒業後の目指す姿・夢については状態目標（理想とする未来）で記入をする。
 - ・学校や作業学習、家庭での目標は結果目標（ゴールを具体的にした目標）を記入する。
 - ・目標を達成するために頑張ることは行動目標（ゴールに近付くための目標）で記入する。
 - ・学期毎に「未来へのスケッチ」を更新し、長期休みに家庭に持ち帰り、保護者からもコメントをしてもらう。
- *状態目標、結果目標、行動目標の詳細はP5ページ参照。



【高等部1年「未来へのスケッチ」】

(3) 保護者と連携して取り組むための仕組みづくり

「未来へのスケッチ」のリーフレットを作成して保護者への周知を行った。リーフレットには、「未来へのスケッチ」作成の意義や、学校と家庭が協力・連携して作り上げていくことなどについて分かりやすく掲載した。

＜リーフレットに記載した内容＞

- ・なぜ「未来へのスケッチ」を作成するのか
- ・どのような様式があるのか
- ・どのように記入をしていくのか
- ・保護者の方をお願いをしたいこと
- ・学校と保護者が連携して作成すること
- ・年2回の面談で「未来へのスケッチ」を話題にし、情報共有すること



【小学部保護者へのリーフレット】

(4) 「未来へのスケッチ」作成から教育資料作成までのシステムの構築

今年度は、「未来へのスケッチ」を授業づくりに活用できるように、授業デザインミーティングや日々の授業づくりを通して、児童生徒の思いや願いを意識しながら実践を積み重ねてきた。「未来へのスケッチ」を日常的に活用し、授業改善を図るためには、学校として整備していかなければいけない課題が多く残されている。課題解決を図るためには、研究部だけでは進めることが難しいため、教務部、進路指導部などの他分掌と連携しながら進めていきたい。1年間各学部で「未来へのスケッチ」を授業づくりへ運用してみて、改善をしたいことなどは以下のとおりである。

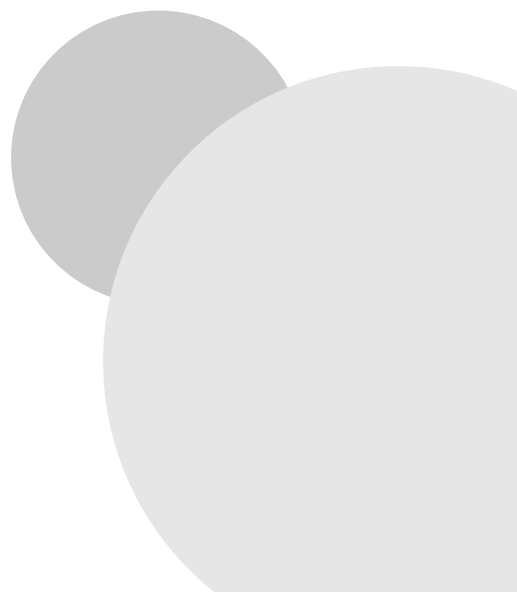
小学部	<ul style="list-style-type: none"> ・もっと具体的で個々の教育的ニーズに基づく必要な力を記載したい。そのために、保護者との共通理解、個別の指導計画をより深めたい。 ・年間を通して、本人に目標を意識させるための工夫が必要である。
中学部	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者ともっとつながりを持ちたいが、保護者面談だけでは足りない。PTAを活用し、「未来へのスケッチ」を話題にしていきたい。 ・本人、保護者の願いという視点で考えると、個別の教育支援計画と「未来へのスケッチ」がつながるようにしていければよい。
高等部	<ul style="list-style-type: none"> ・学期ごとの評価では、目標を意識できない生徒がいるため、評価をする回数を増やしたい。 ・面談と「未来へのスケッチ」作成と教育資料作成の流れを明確にするために、作成までの手順を分かりやすくまとめたい。 ・「未来へのスケッチ」の記載の仕方の活用マニュアルがあるとよい。
寄宿舎	<ul style="list-style-type: none"> ・学校で作成している「未来へのスケッチ」と寄宿舎で作成している「おおぞらシート」の情報を共有しようとしたが、学部や担任によって共有の方法や仕方が違うので、より連携できるような方策を検討したい。

<資料1> 令和6年度研究計画

月	全体の流れ	具体的な取組		
		全校	縦割りでの検討・学部研	その他
4月	○研究主題、研究内容及び方法の検討、共通理解 ○学部の研究内容、方法の検討 ○児童生徒一人一人の目指す姿、思いや願いの聞き取り	□全校研①（4月22日） ・全体研究の共通理解 ・学部、寄宿舎の取組の共通理解	□学部研①（4月24日） ・児童生徒の思いや願い、年間計画等の検討	□拡大研①（4月12日） ・研究内容・方法の検討
5月	○全校、各学部、寄宿舎の研究内容及び方法の共通理解 ○授業実践及び評価、改善 ○単元、題材計画の検討 ⇒授業デザインミーティング実施	□授業デザインミーティングの実施 5月10日 ⇒ ①授業者間、②関係者間での検討（全校縦割りによる検討を行う）	□学部研②（5月27日） ・学部における研究対象教科の実態把握と課題の確認	□クォーター研修会の実施（月1回程度）
6月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部研③（6月26日） ・各学部での授業実践	
7月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施 ○単元構成や支援の評価、見直し ○児童生徒の変容を検証、評価、目標の見直し		□学部研④（7月24日） ・授業実践、評価、改善	○全校授業研究会 小：9月17日 中：7月18日 高：11月28日 ○学部授業研究会 小：11月7日 中：9月9日 高：6月27日
8月	○前期の評価と後期に向けた単元構成、支援の検討、共通理解 ○学級及び学部内で児童生徒の目標の共通理解	□授業デザインミーティングの実施 8月22日 ⇒ ①授業者間、②関係者間での検討（全校縦割りによる検討を行う）		
9月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部研⑤（9月24日） ・目標に対する評価、改善・後期の研究、単元計画や教師の支援の共通理解	
10月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施		□学部研⑥（10月23日） ・授業実践、評価、改善 ・各学部の一貫性の検討	○年次研修 ・対象者と調整 ○他校（特別支援学校、由利本荘・にかほ地域の小・中学校）の授業研究会、公開研究協議会等への参加
11月	○授業実践及び評価、改善 ○授業研究会の実施 ○今年度の取組の成果と課題、児童生徒の変容の検証		□学部研⑦（11月20日） ・授業実践、評価、改善 ・児童生徒の変容の検証	
12月	○今年度の成果と課題、児童生徒の変容の明確化 「研究ゆり」の執筆	教育課程検討委員会 キャリア推進委員会との連携	□学部研⑧（12月18日） ・成果と課題、児童生徒の変容の検証、研究のまとめ	
1月	○今年度の成果と課題の共通理解 ○次年度の方向性の具体化	□授業デザインミーティングの実施 1月9日 ⇒ ①授業者間、②関係者間での検討（全校縦割りによる検討を行う）	□学部研⑨（1月22日） ・研究のまとめの共通理解 ・今年度の成果と課題、児童生徒の変容の共通理解	□拡大研②（2月3日） ・今年度のまとめと次年度の研究テーマ等検討
2月	○今年度の成果と課題の共通理解 ○次年度の方向性の具体化	□全校研②（2月7日） ・今年度のまとめと次年度の検討		
3月	○次年度の方向性の共通理解	□全校研③（3月12日） ・各学部、寄宿舎の成果と課題の共通理解 ・次年度の取組の検討 □出張報告会（同日）	□学部研⑩（3月3日） ・教育課程の編成に向けての検討 ・次年度の取組の検討	



第2章 授業づくりの実際



小学部

1 はじめに

小学部児童は学習に意欲的で、毎日繰り返していることは定着しやすい反面、経験不足等のため自己理解・自己表現がうまくできない児童が多い。しかし、「未来へのスケッチ」の活用が自己理解を促し、適切に自己表現する一助になると考える。

令和5年度の研究より、「未来へのスケッチ」が家庭との連携に一定の効果があることが分かった。一方で、活用の仕方や家庭に協力を得る部分が分かりにくい、様式や活用の仕方が学年によって異なり年度が変わる度に保護者が混乱するのではないかという課題が挙げられた。

そこで、今年度は「未来へのスケッチ」の様式や活用方法を統一し、よりよい活用法を探るとともに、児童や保護者と対話的なやり取りをするためのツールの一つとすることとした。「未来へのスケッチ」の作成を通して対話的なやり取りをして、児童の思いをくみ取り授業づくりに生かすことで、研究テーマに迫ることができると考えた。今年度の研究のゴールは以下のとおりである。

- ①児童の思いや願いを大切にしたい授業づくり
- ②「未来へのスケッチ」を活用した保護者との連携、授業づくり、評価など効果的な活用方法の検討

2 授業づくりの実際

(1) 授業デザインミーティングの実施

対象授業 小学部6年 生活単元学習

<授業デザインミーティング5月>

- ・他の友達に教えることよりも、まずは自分たちが思い切り活動を楽しむことが大事。そこから広げていけるといい。
- ・友達とやり取りする場面、一人一人が活躍する場面を設定する。
- ・得意なこと、できることで役割分担をして、自己肯定感向上につなげる。
- ・動画が好きな児童が多いので、活動や振り返りに動画を活用する。



【ジャムボードでの話し合い】

<授業デザインミーティング8月>

- ・準備、片付け（エプロンを着ける、身だしなみチェック、道具を用意するなど）で、児童同士が言葉を掛け合う場面を大切にしたい。
- ・本時のめあてとなる「チームアップ」のポイントを児童に具体的に提示する。また、視覚的に分かりやすいようにアプリなども使えるとよい。
- ・振り返りのために動画を活用する。子どもに合わせて場面を捉えて撮影し、振り返りで共有し、頑張りを認め合えるようにする。

R6 授業デザインシート

学習グループ及び指導の形態 指導者	小学部6年 生活単元学習 高橋健次、下村志穂、佐々木弘平、佐藤美鈴(高橋真紀)
学習グループの役割 ・区割児童1名在籍。 ・言葉掛けて身辺自立が確立。 ・簡単な指示は理解できるが、不慣れた活動では言葉だけの理解は難しい。 ・見本を見て制作したり、動作をまねたりすることが得意。 ・他者との関わり方が分からない。教師への相談や児童同士のやり取りが少ない。 ・中学部でも活躍できるよう、得意なものを見付けてほしい。	子どもの思いや願い(自立活動の視点も含む) ・家族や先生に褒められたい。 ・料理の勉強がしたい。 ・外に出たり、運動したり、体を動かしたい。 ・みんなと仲良く、安心して過ごしたい。
学習グループ全体で育みたい姿、教師の思いや願い 学習目標:GOI走りだせ チームアップ 力を合わせて頑張る 6年生 ・意欲的に活動に向かう姿。自発的に準備や片付け、自信をもって発表。 ・チームアップ、①友達と仲良く共同 ②協力や助け合う姿 ・中学部でも活躍できるよう、得意なものを見付けてほしい。	
年間の単元計画 (前期) ・6年生スタート ・修学旅行 (後期) ・ゆりフェス 修学旅行を受けて・・・発表的なもの ・卒業関連(文集、記念制作)	(年間を通して) ・じゃがいも栽培と収穫 ・調理実習 ・自分のチャレンジタイム (未来のスケッチ、自立活動、中学部に向けた練習、見学)
教師の支援(手立て) ・授業の流れやグループを同じようにして、見直しをもてるように。 ・活動内容や学習の流れを視覚的に、動画。 ・個の得意不得意に配慮した役割分担。 ・児童同士のやり取りで、教師が仲立ちしたり、伝え方の見本を示したりする。	
授業の工夫(しかけ) ・できるだけシンプルに～ゴール、工程、やり取りなど。 →安心感、主体性、気づき。 ・学習の蓄積個別ファイル。 →振り返り、ハードディスク。 ・家庭と連携、情報共有。 →力試しの機会、達成感。	
関連する各教科等(内容を含む) ・日指(清潔、整理整頓) ・国語(見聞き、話す、書く、伝える) ・算数(数、数値、順番) ・体育(体づくり) ・道徳(自然、仲間) ・自立活動	




【授業デザインシート】

3 授業の実際

(1) 小学部6年 生活単元学習 「チームアップ ～わんこそばをおしえよう～」

(全校授業研究会：9月)

小学部6年児童は「褒められたい」「みんなと仲よくしたい」などの思いや願いをもっている。そこで、好きなことをベースにしなが、自信をもって活動に向かってほしい、楽しみながら友達と協力して活動してほしいと考え、以下のような授業を行った。

授業のしかけ	児童の様子
<p>ゲストティーチャーをお客さん役に</p> <p>繰り返しの活動の中に変化を付け、児童がわくわくする授業を目指した。</p>	<p>繰り返しの活動によりわんこそば会の活動に見通しをもち、自分から取り組むようになった。お客さん役のゲストティーチャーが毎回変わること、「次は誰かな？」と期待感をもち、授業に臨んだ。また、ゲストティーチャーにわんこそば会を楽しんでもらうため、学級の仲間とチームアップできることを考える動機につながったり、授業の振り返りの際、ゲストティーチャーのアドバイスに耳を傾け次時の改善に結び付けたりした。</p> 
<p>児童同士の自発的なやり取りを引き出すための教材や場面の設定</p> <p>友達に働き掛けたり、友達からの働き掛けに応えたりする姿を目指した。</p>	<p>エプロンのひも合わせやのれん付けなど、必然的に友達と協力する場面を設定したことで、「〇〇さん、お願いします」と友達に依頼したり、協力的な態度で応えたりする様子が見られた。わんこそば会の準備や給仕の際に意図的に役割を決めない部分を作ったことで、友達の様子をうかがって行動したり、言葉を掛け合ったりする児童同士の自然なやり取りにつながった。</p> 
<p>ICT機器やアプリケーションの活用</p> <p>授業の学びを実感したり、達成感を味わったりできる振り返りを目指した。</p>	<p>授業の写真や動画を見返すことで、授業のポイントに沿って発言したり、発言が難しい児童は活動時の自分や友達の様子が客観的に分かり、達成感を味わったりできた。</p> 

<指導助言：秋田大学 武田篤名誉教授>

主体的な学びのためには、教師がどう授業をデザインしていくかが大切になる。教師が教えるのではなく、子どもたち自身が考えて試行錯誤して「主体的に学ぶ」ことが求められている。自分で体験していることはイメージしやすいため、今回の授業のように体験したことや繰り返しの活動の中で子どもたち自身が考えて活動するのは意味がある。アクティブラーニングの実践をするとともに、授業づくりの視点を明確にするためにアイコンを指導案に記載する方法を検討してほしい。

主体的な学び	対話的な学び	深い学び
興味や関心を高める	互いの考えを比較する	思考して問い続ける
見直しを持つ	多様な情報を収集する	知識・技能を習得する
自分と結び付ける	思考を表現に置き換える	知識・技能を活用する
粘り強く取り組む	多様な手段で説明する	自分の思いや考えと結び付ける
振り返って次へつなげる	先哲の考え方を手掛かりとする	知識や技能を概念化する
	共に考えを創り上げる	自分の考えを形成する
	協働して課題解決する	新たなものを創り上げる

提案のあったアイコン

【参考資料：独立行政法人教職員機構より】

(2) 小学部1年 遊び 「どきどき！わくわく！みんなであそぼう！ ～うみのせかい～」

(学部授業研究会：11月)

小学部1年児童は、「楽しいことをいっぱいしたい」「一緒に遊んでほしい」などの思いや願いをもっている。そこで、他教科とも関連付けながら、児童の興味が高まっている「海の世界」をテーマにして、一人一人が好きな遊びで時間いっぱい遊んでほしいと考え、以下のような授業を行った。

授業のしかけ	児童の様子
<p>紙芝居の読み聞かせは自分たちが登場するお話にアレンジ</p> <p>読み聞かせに注目したり、活動に期待したりする姿を目指した。</p>	<p>絵本「チリとチリリ うみのおはなし」を児童たちが登場する紙芝居にアレンジして読み聞かせたことで、自分がお話にいつ出てくるのか期待しながら聞いたり、出てきた友達の名前を名前で呼んだりする姿が見られた。お話に出てくる物を見立てたコーナーで遊ぶことへの期待感の高まりも見られ、活動の見通しをもつことにもつながった。</p> 
<p>児童一人一人の好きな遊びを取り入れたコーナーの設定と繰り返しの活動</p> <p>遊びの幅の広がりや周囲の人との関わりの広がりを目指した。</p>	<p>コーナーの中から自分で好きな遊びを選び、時間いっぱい遊んだ。同じ場面設定で繰り返し遊ぶことで、今まで教師が誘っても遊ばなかった児童も、エアトランポリンに自分から乗り、友達のために揺らす姿が見られた。また、教師を介して友達と一緒に遊ぶ、エアトランポリンの空気を意図的に抜くと「膨らませてください」と依頼をするなど、周囲の人との関わりが増えた。</p> 
<p>一つの遊びにみんなで取り組む場面の設定</p> <p>自分の好きな遊びに加えて、みんなと一緒に遊びを楽しめる姿を目指した。</p>	<p>サメの登場により、「仲間を探そう（ミニザメ探し）」「お腹いっぱいにしよう（エサに見立てたカラーボールをサメの口に入れる）」の2つのミッションに取り組んだ。自分の顔写真が付いたミニザメを友達に手渡す、カラーボールが入ったプールを複数人で持ち上げて入れるなど、友達同士で関わり協力する姿が見られた。</p> 

<指導助言：秋田大学 武田篤名誉教授>

知的発達の遅れがある子どもにとって、イメージすることは難しい。イメージをもって遊べるように遊ぶ環境を整えたり、他教科と関連付けたりしたからこそ授業が成り立っていた。

遊びの授業は、子どもが主体的に自由にやるもので、遊ぶこと自体が学び。ティーチングではなく、コーチングが求められる。教師が子どもの内面を読み取って、何が楽しいか、何にわくわくしているか、いかにアイデアを出しているかが遊びの指導の授業づくりのポイントになる。

C
小学部1年 遊びの指導

協議場
児童が自ら遊びに向かい、時間いっぱい遊ぶための手立てや工夫について

個別対応と配慮	環境設定と活動準備	遊びと交流
<ul style="list-style-type: none"> 場から離れてしまったCさんに気づけなかった... 一人遊びも思う存分できる 友達が鳴らしている音声を聴いてAさんトライアングル 	<ul style="list-style-type: none"> 子供達それぞれの「好き」を集めた空間、場の設定、教材 エアトランポリンの近くの壁にセラビーを プールを傾ける、たらいにおもちゃをいれるなど 児童のやりたいことはやってみる 自転車の移動(相手を感傷する仕掛け) 	<ul style="list-style-type: none"> 友達を真似て遊ぶ姿 好きな場所を選んで自分から遊ぶ 一緒に遊ぼう！とTを誘う 少しずつが子供同士を驚きながら遊ぶ
<p>要約</p> <p>遊びと交流</p> <ul style="list-style-type: none"> 友達の動きを見て笑顔になる 「一緒にあそぼう」→「いいよ」の安心感 楽器遊びなど好きなことがいっぱい <p>個別対応と配慮</p> <ul style="list-style-type: none"> 発語のないBさんのきもちの読み取り、代弁 Cさんが場から離れたことに気づけず <p>環境設定と活動準備</p> <ul style="list-style-type: none"> 約30分間遊び切れる会場設営 児童の好きなものがいっぱい関わりたくなる仕掛け <p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> 「ごはんほしいな」→「まってて！」すてきなやりとり プールを傾けるなど児童のやりたいことを試す 	<ul style="list-style-type: none"> 終わりが分かる(感じる)音楽等の仕掛け 最後まで飽きずに遊ぶしかけがたくさんあった 死角が多かった? 約30分間遊び切れる会場設営 	<ul style="list-style-type: none"> Aさん、初めに楽器で遊ぶ 「一緒にあそぼう」、「いいよ」の安心感 友達の動きを見て笑顔になる 「ああ楽しかった。」またやりたい、今度はあれやろうにつなげるため 次のステップ友達と場をもっと共有して一緒に遊ぶ？

紙芝居→自分ごととしてとらえる+友達の表情を遊ぶ

【グループ協議のまとめ】

5 まとめ

(1) 学びたい気持ちを高め夢中になって取り組むために必要なこと

小学部では自分の気持ちをまだうまく表現できない児童が多いため、教師が児童と対話的にやり取りして丁寧に思いや願いを聞き取ること、興味・関心を見取ることが必要であることを確認した。また、それらを授業づくりに反映させるため、子ども中心の単元計画や授業づくりをしようとする教師の意識の向上が見られた。

低学年では、児童の興味・関心をよりの確に把握するため、今の児童の実態や好きなこと、何ができるようになったかなど、「〇年生のスケッチ」を見ながら教師間で話し合い、共有を図った。児童の興味・関心が高い題材をテーマとして設定し、遊びや生活単元学習、国語・算数など、他教科等と関連させながら授業づくりをした。

高学年では、「未来へのスケッチ」の作成や児童とのやり取りを通して、丁寧に児童の思いや願いを聞き取り、児童の思いや願いを土台に繰り返しの活動を設定した。その中で一人一人の児童が活躍する場面を設定する、ゲストティーチャーを登場させるなど、期待感をもたせる工夫をした。

(2) 未来へのスケッチの活用

「未来へのスケッチ」のねらいや活用方法を教師間で共通理解して進めたことで、有効だった手立てや課題が明確になり、疑問や改善案を出しながら運用することができた。学部全体で児童の思いや願いをどう聞き取っているか、日頃どう活用しているかなどを共有し、考えを深めることができたことは、成果として挙げられる。「未来へのスケッチ」は、児童の思いや願いを聞き取るための一つのツールとして有効だった。一方で、年間や学期という長期の「なりたい自分」や目標を考えることが難しい児童、構えてしまって気軽に発言できなくなる児童もいたことから、個々の実態差にどう配慮していくかが課題に挙げられた。

低学年では、興味・関心のある題材をテーマに設定したことで、時間いっぱい遊ぶ姿や、やりたいことや楽しいことを言葉や指差して伝える姿を引き出すことができた。また、他教科等と関連させながら学習したことで題材への理解が深まり、言葉や活動のイメージがもてるようになった。語彙が増え、自分から友達に関わろうとする姿や場面に応じた言葉ややり取りを楽しむなどの姿につながった。

高学年では、児童の思いや願いから好きなことをベースに繰り返しの活動を設定したことで、児童が意欲的に活動に向かう姿を引き出すことができた。活動を繰り返すうちに、少しずつ自信をもって自分から準備や片付けをしたり、役割に取り組んだりするようになった。また、自信がついたことで、教師を介さずに児童同士で協力して活動を進めたり、自発的にやり取りしたりする姿が増えた。授業以外でも児童同士の関わりが増え、関わりの増加や広がりが見られた。

(3) 今後に向けて

子どもの思いや願いを大切にしたい授業づくりは、子どもの学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を引き出すこと、子ども中心に授業づくりや単元計画を見直す教師の意識の向上にも有効だった。

今年度、「未来へのスケッチ」のねらいや活用方法については学部全体で共通理解しながら運用したが、教師には意義や使い方、運用スケジュールなどについての資料がなく、全体的な流れが分かりにくい状況だった。また、児童の思いや願いを聞き取り、それを家庭と共有し連携していく手段として「未来へのスケッチ」を活用したが、家庭から協力を得る部分はどこか、どう連携に生かすか学年によって実態が異なる場所があった。教師からは「なりたい自分や頑張りたいことをどうイメージさせるか」「思いや願いを授業につなげることが難しい」という課題が挙げられた。今後、「未来へのスケッチ」の作成手順を可視化するとともに、項目の整理や検討、作成や活用の仕方を共通理解しながらさらに改善を重ね、授業づくりや家庭との連携に生かしていきたい。

【資料】児童の変容

①対象児童 小学部6年 A

<実態>

- ・困っていても適切な話し方が分からず、活動を止める、友達に依頼できないことがある。
- ・自信がないことから、小声になったり、場に耐えきれず突然泣きだしたりすることがある。
- ・表や言葉を参考に手順どおりに活動を進める。繰り返しの活動では、自分から進んで取り組む。

<「未来へのスケッチ」からの思いや願い>

- ・苦手な勉強も諦めない。
- ・困ったら、相談する。友達と協力する。

<授業を通してのエピソード>

- ・ボッチャの練習を繰り返し行う中で、順番を友達に伝える様子が見られるようになった。
- ・活動に遅れている友達を呼んだり、道具を運ぶ場所を指差して教えたりした。
- ・友達の発表を聞いて、自分から拍手することが増えてきた。

<授業以外や関連したエピソード>

学校生活（関連した教科など）	家庭生活など
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の手伝いを快く引き受けて取り組むことが増えた。 ・次にやるべきことや解決策を教師に相談することが早くなってきた。 ・国語の発表や朝の会の司会の声が大きく、聞き取りやすくなってきた。（未来へのスケッチの目標を意識できている？） 	<ul style="list-style-type: none"> ・洗濯物干しや畳む手伝いを毎日行うようになった。 ・ダイエットのため、食事量や運動時間を自分で気にして頑張る様子が増えてきた。

②対象児童 小学部6年 B

<実態>

- ・意に沿わないときや、注目してほしいときなどにつば吐きや尿失禁などの行為が見られる。
- ・教師との関わりが多く、廊下で会う教師に自分から挨拶したり、やってほしい遊びを頼んだりする。
- ・学部集会や全校集会等の集団の学習にも落ち着いて参加できるようになってきた。

<「未来へのスケッチ」からの思いや願い>

- ・みんなと一緒に色々なことにチャレンジする。

<授業を通してのエピソード>

- ・友達に呼ばれて一緒に移動したり、友達から道具を受け取って活動に取り組んだりした。
- ・学級でボッチャの練習を繰り返し行うことで、小学校との交流でも、教師が側につかなくても見通しをもってゲームに参加できた。

<授業以外や関連したエピソード>

学校生活（関連した教科など）	家庭生活など
<ul style="list-style-type: none"> ・毎日行う朝・帰りの活動や清掃活動は、教師の見守りだけで一人で取り組むことが増えた。 ・夏休み明けから興味のあるもの（寄宿舍のトランプ、友達のプリント類）に向かって衝動的に走りだすことが増えた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・トイレの要求や場面に合った気持ちの言葉を話すことが増えてきた。 ・外出先でも落ち着いて家族と移動できるようになってきた。

中 学 部

1 はじめに

中学部生徒の実態として、経験不足から活動へのイメージをもつことが難しく、将来への夢や目標についても漠然と考えている生徒が多く、学んだことを知識として獲得しても、継続して取り組まないと忘れてしまうことが多い。また、繰り返して取り組むことで達成感を得た経験が少なく、自己理解が不十分なため、自己肯定感が高すぎたり低すぎたりする生徒が多い。

生徒の「こうなりたい」「やってみたい」という思いや願いを大切にし、できたことの積み重ねを感じることができるような実践を進めていく。自分のできたことが認められることで、自己肯定感を高め、自信をもって取り組むことができるようになる。それはさらに「やってみよう」や「がんばってみよう」という気持ちにつながるのではないかと考えた。

中学部の今年度の研究のゴールは、以下のとおりである。

①対話を通して作成した「未来へのスケッチ」を活用し、生徒の思いや願いを受け止めた授業を実践すること。

②「成長の記録」を作成し、活用することで、生徒のできるようになったことやできるようになったことの積み重ねが視覚的に分かるようにすること。

そのような「生徒のできたことが認められる授業実践」を積み重ねることで、生徒は自己肯定感を高め、もっと学びたい気持ちを高めて夢中になって取り組む姿につながると考える。

2 授業づくりの実際

(1) 授業デザインミーティングの実施

対象授業 中学部2年 職業・家庭科

<授業デザインミーティング5月>

○学習グループの実態

- ・実態差は大きいですが、繰り返しの活動で自分のすることが分かる。
- ・できることは多いが、面倒くさがり、生活リズムや身だしなみが乱れがちである。
- ・食べることへの関心が高い生徒が多い。

○生徒の思いや願い

- ・働いてお金を稼ぎたい。
- ・身の回りのことを一人でできるようになりたい。
- ・友達と仲良くすごしたい。
- ・自分の頑張りを認めてもらいたい。

○出されたアイデア

- ・得意な役割を設定して自信をもって活動する。
- ・友達と関わる必然性の設定や配置の工夫をする。
- ・接客の際にアンケートやチラシなどを活用する。
- ・本物を見学してイメージをもつ。
- ・調理の基本を押さえて指導する。
- ・他の教科と連携しながら取り組む。

<授業デザインミーティング8月>

○これまでの取組

- ・ピザ屋さんに行き、お店の見学や質問をした。
- ・接客のポイントマニュアル「あいさつ・スマイル編」「身だしなみ編」「清潔編」「水出し編」「片付け編」を作成した。
- ・生活単元学習で行ったピザ屋さんで接客の必要性を感じ、職業・家庭の授業で接客を学習することにした。

○生徒の変容

- ・自分たちで考えた「接客のポイント」が実生活の中で実践された（手洗い・歯磨き）。
- ・友達に拍手や肯定的な言葉掛けが増えた。

○話題になった内容

- ・働く楽しさを実感できるよう、工夫する。
- ・お客さんからの評価をもらい、改善につなげる。
- ・水出しの一連の流れを繰り返し、お客さんを意識して水出しができるようにしたい。

3 授業の実際

(1) 中学部2年 職業・家庭科 「やってみよう！接客の仕事①」 (全校授業研究会：7月)

中2の職業・家庭科の授業では、生徒たちは「未来へのスケッチ」に「働いてお金を稼ぎたい」や「おいしいものが食べたい」「お母さんのような役割(料理など)をしたい」と記入し、その思いや願いを受け、生活単元学習ではピザ屋さんの開店に向けた学習をしている。職業分野では、開店時に必要となる接客を主に学習し「中2接客のポイント」を作りあげていく。このポイントは、生活単元学習で実践し、お客さんからの評価を受けて、お客さんとの関わり方を改善していく。授業のしかけと生徒の様子は以下のとおりである。

授業のしかけ	生徒の様子
<p>学習したことを発揮できる場面の設定 生活単元学習との学習内容を関連付けて計画した。</p>	<p>・生活単元学習のピザ屋さんで、お客さんに喜んでもらいたい、笑顔になってもらいたいという気持ちを持ち、接客で大切なことを考えて友達に伝えたり自分たちで考えたポイントを活用しながら水出しのロールプレイに参加したりした。</p> 
<p>ICT機器やアプリケーションの活用 どんな意見が出たか視覚的に見たり、思いを伝え合ったりするためにICT機器を活用した。</p>	<p>・「笑顔」を意識できるように、タブレット端末に顔を写して「スマレジ・タイムカード」を使用し、スマイルチェックをした。始めは、笑顔を見せることを苦手としていたが、回数を重ねる毎に、自分からタブレット端末の前に行き、笑顔を見せるようになった。また、グループの話し合いでは、オンライン掲示板アプリ「Padlet」を使いグループの意見をタブレット端末で記入し、テレビに映し出されることで、それを参考にしながらロールプレイに取り組んだ。</p>  
<p>友達のよさに気付いたり、意見を伝え合えたりする小グループの編成 友達のよさや頑張り認め合う姿を目指して小グループ編成にして話し合い活動を行った。</p>	<p>・4～5人の小グループを編成したことで、自分の考えや意見を積極的に伝えたり、ロールプレイ後に友達のよかったところを伝えたりすることができた。また、授業を重ねることで、友達の良いところに気づき、「〇〇さんがこぼさずにお茶を運んでいてすごかったです」などと、具体的に伝える姿が増えていった。</p> 

(2) 授業研究会の様子

授業研究会では、「障害の重い生徒の職業分野についての効果的な学習について」で協議を進めた。協議で話題になった内容として、職業・家庭科と生活単元学習のつながりがみられ、効果的に指導が進められていたことが評価された。また、みんなと同じ活動ではなく、実態に応じて活動内容を工夫すること、体験的な活動を繰り返し行うことで定着することが話題になった。

今後に向けては、体験から学ぶことができるように、喜ばれる経験の積み重ねをし、実際の体験活動の時間を確保すること、自分でも「やればできる」という気持ちを大切にすること、他者から認められる、喜ばれる経験から働くことへの前向きな気持ちにつなげたい、生徒が振り返りやすいように分かりやすい言葉を使いながら学習を進めていきたいことなどが挙げられた。

4 「未来へのスケッチ」「成長の記録」について

(1) 「未来へのスケッチ」の活用

「未来へのスケッチ」は、できないことに目を向けるのではなく、できたこと、できるようになったことに目を向けていくこと、夢や目標に向けて努力する過程を記録し、自分の行動を振り返るものになればと考えている。昨年度、様式を生徒が活用できるものに変更し、1か月毎に新しい用紙に記入するようにした。生徒自身が目標を達成するために何を頑張るかの視点で記入をすることにしている。生徒によっては月の目標を、小学校の通知表の生活欄から抜粋したものを参考にしたり、目標とすることを提示したイラストから選択し、記入したりした。週の目標については自分を振り返って○や△でチェックをした。毎月一回、担任、家庭からのコメントを記入した。

生徒と教師の対話により考えを深めて、記入ができるよう、毎月初めの「職業・家庭」の時間に月の目標の作成や振り返りを行い、毎週金曜日に、週の目標の作成や振り返りを行った。

【 図1 職業・家庭科の時間での中学部「未来へのスケッチ」作成方法 】

○月初めの「職業・家庭」の時間

- ・「なりたい夢や目標」「月の目標」を記入
- ・担任が確認、教室に掲示
- ・保護者へコピーを渡す

○月初めの「職業・家庭」の時間

- ・先月の目標の振り返りを記入
- ・担任がコメントを記入
- ・家庭に持ち帰り、保護者からコメントをもらう

○毎週金曜日

- ・学校、家庭における週の目標を振り返る
- ・学校、家庭における来週の目標をたてる

○目標や振り返りの記入では、実態により次のような工夫もあった。

〔目標設定〕

- ・学校、家庭で困っていることがないかを聞き出した。
- ・目標設定の参考にできるように、作成する月の予定や、学級の月の目標を提示した。
- ・生徒同士でペアを組んで作成し、友達の家庭での手伝いや目標を比べることで、ヒントを得られるようにした。

〔振り返り〕

- ・一週間の出来事を提示して達成したことを思い出すことができるようにした。
- ・一週間で頑張ったこと、できるようになったことを項目として提示し、選択できるようにした。

【 「未来へのスケッチ」 】

(2) 成長の記録の活用

「未来へのスケッチ」を通して自分を振り返り、「できたこと」「できるようになったこと」を「成長の記録」に付箋で貼るようにした。学校、家庭の欄があり、それぞれでできたことを貼っていくようにした。

生徒、教師で「こんなことができるようになったんだね」というような会話が日常的に交わされるようになってほしいと考えた。成長の記録が生徒や教師にとって日常的なものになるように、次のように取り組んだ。

①成長の記録の掲示

生徒、教師が視覚的によく目にするように、日常、よく集まって活動する多目的教室に全生徒の記録を掲示した。

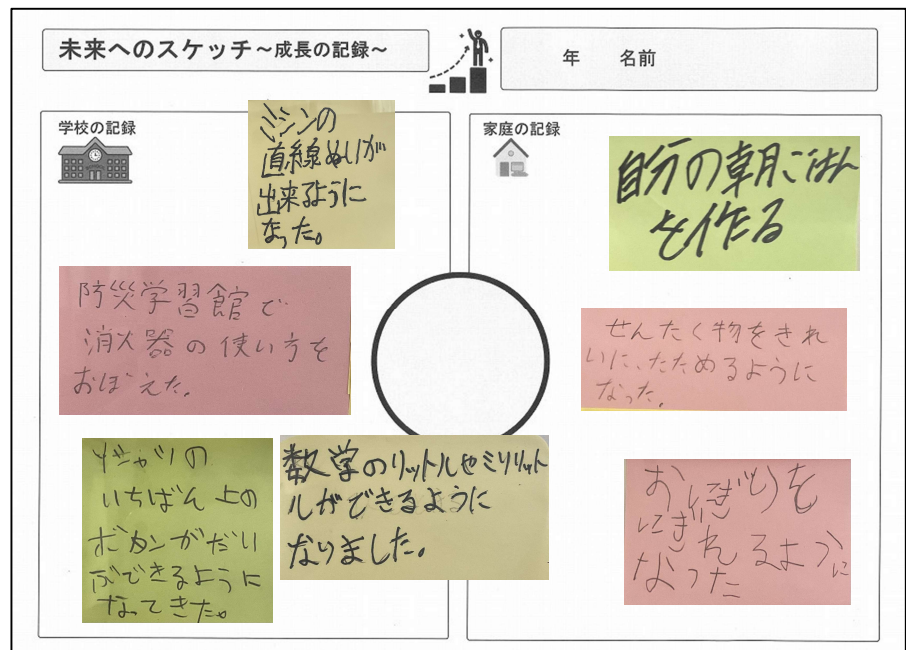
②できるようになったことの紹介

友達「できるようになったこと」への関心を高め、称賛される機会が増えるように、毎月の中学部集会で紹介するコーナーを設けた。各学級で担当し、ピックアップされた生徒が発表するようにした。

生徒によってはできるようになったことを実際にやって見せたり、動画で紹介したりして注目してもらおうように工夫した。

(3) 成長の記録の検討

未来へのスケッチの作成や成長の記録への記録は、生徒と教師が対話を通して行っている。もっと生徒に気付いてほしい「できるようになったこと」はないか、またこれから「できるようになってほしいこと」は何か、学部研究会の時間に、全生徒について学級で付箋を使って話し合いをする機会を設けた。



【成長の記録】（コメントは複数の生徒の付箋から抜粋）



【成長の記録の掲示】（共有スペースにまとめて掲示）



5 まとめ

(1) 学びたい気持ちを高め夢中になって取り組むために必要なこと

今年度は、年度当初から「未来へのスケッチ」の活用をしていたことから、職業・家庭科の年間指導計画に生徒の思いが反映された。また、「未来へのスケッチ」の作成を毎週、毎月、対話を通して個別に行ったことは、学びたい気持ちを高め夢中になって取り組むために必要な、変化する生徒の思いや増えていく成長を捉えることにつながった。

全校授業研究会や学部授業研究会の該当授業では、授業デザインミーティングで授業づくりの段階から他の学部の教師の意見を聞くことで、実際の授業へのアイデアや単元の展開の広がりへのアイデアを得ることができた。また、学部内での授業検討会で模擬授業により授業を検討したことで、具体的に生徒への対応や授業の展開を見直し、教材の提示や教師の働き掛けが精選された。

(2) 未来へのスケッチの活用

「未来へのスケッチ」作成では、自分で目標や振り返りを考えて作成する生徒が多くなった。また週の目標を意識して活動する生徒も多くなった。教師は未来へのスケッチの作成時に目標をどの場面で達成させるか、具体的に問い掛けたり提案したりすることが多くなり、生徒の思いを授業に反映させようとする意識が強くなった。

成長の記録の使い方も浸透してきて、できるようになったことがあれば、教師の働き掛けがなくても自分から付箋に記入し、貼る生徒も見られるようになった。

成長の記録は普段目にしやすい箇所に掲示されていることから、たくさんの付箋が重ねられた記録を見て自分の成長を感じ、嬉しそうに話す生徒も増えてきている。

また教師は、生徒自ら成長の記録にできるようになったことを付箋で貼ることで、生徒と成長を共有することが増えた。中学部一人一人の生徒の成長に気づき、生徒へ言葉を掛けることも増えてきている。

学部集会での、できるようになったことの発表では、生徒によっては動画での紹介や実際の演示を行い、称賛された。成長の記録への付箋の貼り付けだけでは得られない心地よい気持ちを得ることができたと思われる。



【成長の記録を見る生徒】

(3) 今後に向けて

「未来へのスケッチ」については年度当初の面談で作成について説明をし、協力を依頼しているが、保護者の意識の差が大きく、コメントが返ってこなかったり、家庭での取り組みに協力が得られなかったりする。そのため成長の記録についても家庭の欄が空欄になりがちであった。家庭の欄の付箋が増えるように保護者との連携について検討が必要である。

「未来へのスケッチ」や「成長の記録」の作成では、生徒との対話、学級での話合いが有効であった。生徒、教師ともに作成の仕方に慣れ、作成がスムーズになってきているが、対話を通して作成することから、相当な時間を必要とする。職業・家庭科の学習活動に組み込むなどしながら時間の確保をし、生徒が自分の成長を感じ、なりたい自分に近付くような授業づくりにつなげていきたい。

【資料】 生徒の変容

対象生徒 中学部 2年 A

<実態>

- ・大人や気の合う先輩との関わりが中心で、同級生との関わりは少ない。
- ・自分を客観視することが苦手で、何事にもマイルールで行動することが多い。
- ・自分よりも下に見た生徒に対しては、強い言葉で指示したり見下したような発言をしたりする。
- ・根は優しくユーモアがあり、細かいことに気付いてさりげなく手伝ったり、情緒が乱れた友達を心配したりする様子が見られる。
- ・教師や友達に期待されていることがわかると、期待に応えようと頑張る。

<「未来へのスケッチ」からの思いや願い>

- ・健康に気を付け、生活し運動もする。
- ・会社で働いている自分になりたい。



<授業を通してのエピソード>

- ・目上の人に対しても、腕を組んだりのけぞった姿勢で接したりすることがあったが、働く人へのインタビューの練習を通して、先生方や職場見学先の方へのインタビュー時の態度がよくなった。
- ・「相手が笑顔になる接客」の学習で、アプリを使ってスマイルチェックをした際に、一生懸命「スマイル」をつくって友達から拍手をもらった。また、友達がスマイルチェックでクリアした際は、拍手を送った。
- ・普段はBさんに対して冷たい言動をすることが多いが、お茶出しの練習をした際、「Bさんがこぼさずに運んでいてすごかった」と感想を発表した。



<授業以外や関連したエピソード>

学校生活(関連した教科など)	家庭生活など	地域での余暇活動など
<ul style="list-style-type: none">・「机を運んでおきました」「配付物を取ってきておきました」など、誰かのために行動することが増えてきた。・同級生が、高等部の先輩に悪く言われたことに対して教師に不満を伝えた。	<ul style="list-style-type: none">・自分に対して言い返すことが多いが、先生たちと人の気持ちについて話をしているせいか、以前に比べると優しくなった。 (母親より)	<ul style="list-style-type: none">・同じバス停を利用している友達の保護者に挨拶するようになった。

高等部

1 はじめに

生徒は、学期ごとに自分の卒業後の姿を考えて「未来へのスケッチ」を作成する活動は定着しているが、自分の目標を自分事として捉え、目標を意識しながら学校生活を送ろうとする生徒が少ない。その背景として、生徒の自己理解が不十分なため将来の見通しがもてなかつたり、経験不足により集団の場で善悪を判断して行動することが難しかったりする状況が挙げられる。

昨年度の研究から、「未来へのスケッチ」を活用した家庭・寄宿舎との連携や学級担任と他教科等の担当との情報共有が課題に挙げられている。連携や情報共有の仕組みを整え、生徒の思いや願いを反映した授業づくりや、生活面での学びが家庭生活、社会生活に生かせるような工夫が必要である。

高等部の今年度の研究のゴールは、以下のとおりである。

- ①「未来へのスケッチ」を活用し、家庭、寄宿舎、各教科等の担当が情報共有する時期や手段を検討し、実施する。
- ②「未来へのスケッチ」を基に学習内容や単元を計画し、生徒が学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む姿を引き出す授業を実践する。

2 授業づくりの実際

(1) 授業デザインミーティングの実施

対象授業 高等部1年 生活単元学習「お役に立ち隊プロジェクト」

<5月 授業デザインミーティング①>

学習グループの実態

- ・入学して1か月が経ち、学校生活に慣れてきた。
- ・友達同士の関わりが概ね良好だが、トラブルも見られ始めた。
- ・挨拶や言葉遣い、生活態度等に課題がある生徒が多い。
- ・自信のなさや困り感を正しい方法で伝えることができない生徒がいる。
- ・将来的には、ほとんどの生徒が働きたいと希望している。

年間の単元計画

- ・他学部との交流
- ・外部（福祉エリア施設）との交流

他者との関わりを経験する活動を主軸において、学習活動を考えたい。

育みたい姿（教師の思いや願い）

- ・挨拶や言葉遣い、生活態度等、卒業後の生活の土台となる部分をしっかりと身に付けてほしい。
- ・相手の気持ちを考えたり、思いやりのある言動をしたりする姿を増やしたい。
- ・自分に自信をもって活動する姿を増やしたい。
- ・自己理解を深めてほしい。

アイディア

- ・学級づくりを大切にしつつ、同学年で交流の機会をもつ。
- ・同じ相手と交流を繰り返す。
- ・段階を踏んで、様々な発達年齢や生活年齢の人と関わる。
- ・近隣の施設との交流を計画する。
- ・活動ありきでなく、生徒の実態やニーズから検討する。
- ・夢をもつことは大事であり、生徒の思いもたくさん聞き取って、授業に生かす。

<8月 授業デザインミーティング②>

これまでの取組

- ①学年のルール決め
 - ・“1年後どのような自分になりたいか”、“どのような学年にしたいか”を学年全員が考え、それを基に学年のルールを決める時間を設定した。
- ②『お役に立ち隊プロジェクト』
 - ・小学部1年生からの依頼を受け、水遊びで使う手作りおもちゃを作ってプレゼントした。

アイディア

- ・生活単元学習と職業科の授業をうまく組み合わせながら進める。
- ・他学部児童生徒との関わりから、地域との関わりにつなげていく。
- ・自己有用感を高めることができるように、相手に喜んでもらう体験を積み重ねる。
- ・働く意義について考えることができるように、先輩から話を聞いたり、2年生の実習報告会に参加したりする。

(2)「未来へのスケッチ」の活用

入学して間もない高等部1年生は自分の卒業後の姿をイメージすることが難しく、「未来へのスケッチ」を記入できない生徒が多くいた。学年のルールを決める際に、“1年後どのような自分になりたいか”、“どのような学年にしたいか”について話し合ったことで、それぞれの1年次に頑張りたいことが明確になり、「未来へのスケッチ」に次のような卒業後の目指す姿・夢を記入した。

1年後どのような自分になりたいか	どのような学年にしたいか
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自主自立 ・ バスケがうまくなっていたい ・ 後輩に頼られる人になりたい ・ できることを増やしたい ・ 一人で洗濯できるようになりたい ・ 今より優しい人になりたい ・ 筋力をアップしたい ・ 料理ができるようになりたい 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 盛り上がりたい ・ 居心地がよい学年にしたい ・ 仲良くしたい ・ 支え合える学年にしたい ・ 意見を言いやすい学年にしたい ・ 高め合い、成長する学年にしたい

「未来へのスケッチ」卒業後の目指す姿・夢

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 自立した人 ・ 丈夫で、いろいろな人と仲良くできる人 ・ 優しく接する人 ・ 絵の勉強を頑張りたい ・ 家庭を支える人 ・ 責任感がある人 | <ul style="list-style-type: none"> ・ お金を稼いで生活する ・ 仕事を頑張って結婚する ・ スポーツトレーナー ・ 周りに頼られる人になる ・ 本屋さんで仕事をする ・ 保育士になる |
|--|---|

生徒のこれらの“目指す姿・夢”を基に、生活単元学習『お役に立ち隊プロジェクト』を計画し、小学部1年生や近隣の高齢者施設との交流を通して、生徒の自己有用感や相手を思いやる気持ちを育むことを目指した。

(3) 全校授業研究会の実施

①生徒が学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む授業づくり

ア 単元の工夫

生徒が「未来へのスケッチ」の“卒業後の姿・夢”に記入した「優しく接する人」「責任感がある人」「周りに頼られる人」「保育士」になりたいという思いに焦点を当て、身近な人の役に立ち、感謝される経験を通して、生徒一人一人がやりがいを感じて活動に参加したり、相手を思いやる気持ちを育んだりできるよう、近隣の高齢者施設との交流の機会を設定した。

イ 授業の工夫

・実態に応じたワークシートの活用

生徒が自分なりの意見や感想を、自分の言葉でまとめられるよう、実態に応じて記述式と選択式のワークシートを準備した。

グループでの話し合いの前に意見をまとめられたことで、グループのリーダーを中心に活発に意見交換する姿が見られた。

・話し合い活動場面のグルーピングの工夫

【記述式ワークシート、選択式ワークシート】

生徒が主体的に話し合い活動に参加するよう、グルーピングを工夫した。大きな集団では自分の考えを伝えることが難しい生徒が積極的に発言したり、友達の意見に耳を傾けたりする姿が見られた。また、リーダーとして友達の意見を引き出したり、まとめたりすることをねらう生徒を各グループに配置したことで、教師の支援を減らし生徒たちが協働的に話し合う姿につながった。

・キーワードでまとめる

話し合いを深めるために、グループ内で出た意見をキーワードでまとめ、他のグループに提案する活動を設定した。「よかったところ」、「改善点」について出た意見を箇条書きするのではなく、自分の意見と友達の意見の共通点や違いに気付いたり、具体的な意見になるように言葉を付け加えたりしながら、グループとしての意見を整理することにつながった。

話し合いメモ	キーワード
<p><よかったところ></p> <ul style="list-style-type: none"> 振りつけが良かった みんなが笑顔だった 曲に合わせて踊っていた 見ていて楽しかった ソロがおもしろかった <p><改善点></p> <ul style="list-style-type: none"> 動きを合わせるともっと良くなる リズムにのれていなかったところがあった 手があがっていないところがあった アピールがあるとよい 	<p>振りつけが良かった</p> <p>楽しかった</p> <p>動きを合わせる</p> <p>アピール</p>

【キーワードでまとめるワークシート】

②授業研究会の協議から

協議テーマ 生徒たちが協働して課題解決に向かうための支援の工夫について

<協議で話題になった主な内容>

- ・高齢者が楽しめる発表を考える内容だったが、生徒によって高齢者のイメージが異なる。
- ・話し合いの時間を充実させるため、ワークシートや付箋紙の活用など、方法は他にもありそうだ。
- ・まとめの時間配分を考えた授業の計画が必要ではないか。
- ・グルーピングが工夫されており、もっと生徒同士で話し合いを進められそうだ。

<今後に向けての提案>

- ・話し合いの中で、話す人、聞く人などのルールが決められるとさらによいのではないか。
- ・高齢者についてもっと詳しく知ることで、自分たちで何ができるか考えられるのではないか。
- ・生徒の意見をつなぐ教師の支援があると、話し合いが深まるのではないか。

4 まとめ

(1) 生徒が学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組むために必要なこと

生徒との面談を通して生徒の思いや願いを丁寧に聞き取ったり、授業デザインミーティングで思いや願いを反映させたりしながら、生徒が主体的に学べるよう単元の工夫をしていく中で、生徒と一緒に授業を作り上げていくという意識が高まった。また、高等部1年生では、教科横断的に年間指導計画を見直し、学びのつながりをもたせた。

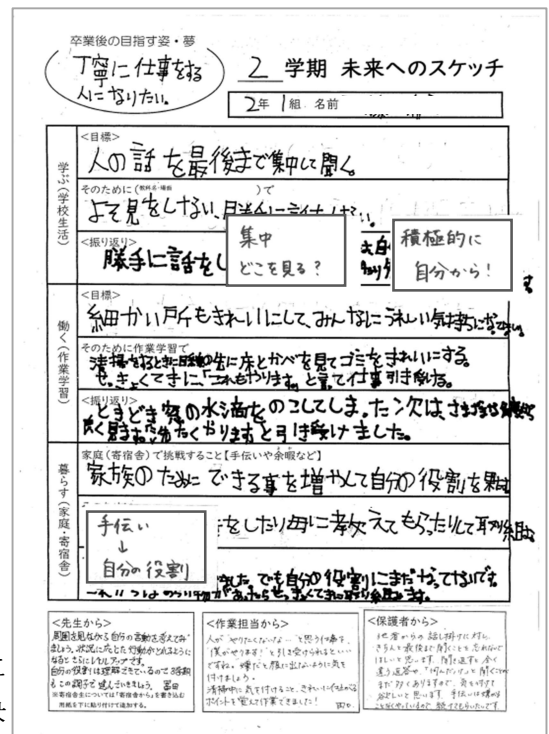
生徒が「未来へのスケッチ」に記述した思いや願いを取り入れた学習を実施することで、生徒が学習上のめあてや課題を自分事として捉え、課題を主体的に解決しようとする姿勢を引き出すことにつながった。

(2) 未来へのスケッチの活用

「未来へのスケッチ」の“働く（作業学習）”の目標を、これまでは生徒と学級担任との面談の場を設け、対話を通して記入していた。今年度は、作業学習担当との情報共有や目標を学習に反映させることの難しさを改善するため、生徒と学級担任との面談で話題になったことや課題を付せん紙に記入して貼り、作業学習担当と一緒に目標を立てることで、個々の目標や課題解決に迫る学習を展開するようになった。また、個人面談や連絡帳を通して、保護者とも目標や評価を共有した。

「未来へのスケッチ」の活用を通して、教師が生徒と向き合い理解を深めるだけでなく、教師間や保護者との連携を強められている。

高等部3年生は、「未来へのスケッチ」の評価と新たな目標の設定を、現場実習後に実施した。卒業後の生活が間近に迫っている3年生にとっては、実習で見付かった課題の解決が目標となり、自分事として目標を意識しながら学校生活に取り組む姿が見られた。



【付せん紙を活用した未来へのスケッチ】

(3) 今後に向けて

① 生徒が目標を意識する工夫

「未来へのスケッチ」を活用し、教師の授業づくりに対する意識が変容したことで、生徒自身が学校生活の中で目標を意識し、努力していこうとする姿が見られるようになった。今後は、今年度の研究を生かし、計画的、効率的に生徒の自己理解を深め、生徒が「未来へのスケッチ」を活用し、主体的に課題解決に向かえるよう、評価の時期、方法を検討したい。

② 寄宿舎との連携

寄宿舎では「おおぞらシート」を活用して生活面の目標を立てている。学校と寄宿舎で立てた生活の目標や互いの取組を共有し、寄宿舎の個別の生活指導計画と「未来へのスケッチ」の目標の達成に迫る指導ができるよう、面談や情報共有アプリケーションを活用した連携方法を工夫していきたい。

【資料】 生徒の変容

対象生徒 高等部 1年 A

<実態>

- ・苦手なことでも「できるようになりたい！」という気持ちが強く、自分から努力する。
- ・周囲を思いやり、協調性がある。
- ・家事の経験が多く、積極的に取り組んでいる。
- ・小中学校時代は不登校であったため、経験不足から知識が乏しい。
- ・経験したことがない事項を、言葉や文字だけの指示で理解することが難しい。また、分からないことを自分から聞くことが苦手で、一人で何とかしようとして時間が掛かる。
- ・伝えたい内容を端的にまとめて書いたり話したりすることが苦手。文章を書く際は、主語・述語・補語等を整理して書くことが難しい。
- ・体力がなく、体調を崩して欠席したり、授業中に居眠りをすることがある。

<「未来へのスケッチ」からの思いや願い>

- <1学期>・家庭を支えることができるようになりたい。
 - ・手先を使った仕事をする職業に就きたい。
- <2学期>・周りの人に優しくできる人になりたい。
 - ・困っている人がいたら助けられるようになりたい。
- <3学期>・体調管理を心掛けたい。
 - ・家庭でも家事ができるようになりたい。

<授業を通してのエピソード>

- ・小1の児童に水遊びで使う大型おもちゃを作ってプレゼントした。小1が遊ぶことを考えて積極的に意見を出したり、時間いっぱい手を止めずに活動したりした。
- ・あじさいの郷訪問に向けて、自分からダンスの内容を提案したり、副リーダーに立候補したり、意欲的に活動した。

<授業以外や関連したエピソード>

学校生活(関連した教科など)	家庭生活など
<ul style="list-style-type: none">・授業開始の「5分前だよ」と友達に声を掛ける姿が見られた。・お楽しみ企画で、始めはためらっていたが、みんなの前で歌を披露した。・学習発表会の練習で、せりふのある役に立候補し、オーディションに挑戦した。せりふを自分なりにアレンジしたり、できるだけ覚えて話そうとしたりする姿が見られた。・作業学習で窓清掃をした。窓に汚れや水滴を残さないように、様々な角度から点検をした。担当する窓の清掃が終わると、次の場所を自分で探して終了時間まで集中して取り組んだ。	<ul style="list-style-type: none">・小中学校では不登校傾向だったが、体調を崩して欠席する(月1~2日程度)以外は登校している。学校は楽しいと話している。

寄宿舎

1 はじめに

今年度は、男子10名、女子8名の計18名でスタートした。途中の入退舎があったが、現在も中学部、高等部の18名が在舎している。入舎当初は、経験不足による自信のなさから、消極的だったり、不安や困り感などを言葉で伝えることが難しかったりする様子がみられた。生活経験を積み重ねることで自信を付けたり、職員や友達とのやりとりから少しずつ適切な関わり方や伝え方を身につけたりするなど、集団生活を通して、様々なことに前向きに取り組む姿がみられるようになっていく。

寄宿舎では、令和2年度より、「おおぞらシート」を活用して生徒自身が目標設定や評価に関わることで、自ら考えたり、行動したりするなど主体的に生活する姿を目指した生活指導を進めている。学部では、「未来へのスケッチ」を教育活動や授業とつなぎ、どのように活用すべきか考える段階になってきた。課題の一つとして「未来へのスケッチ」を作成する工程に家庭との取組や評価の共有、寄宿舎の「おおぞらシート」を活用した情報共有と連携を図りたいと昨年度の研究から挙げられている。

以上のことから、「未来へのスケッチ」を活用した学部との連携により、生徒の学びたい気持ちを高め、経験の充実から自身の生活をよりよくしようとする意識を育むことを目指し、本研究に取り組むこととした。

2年計画の研究のゴールは以下のとおりである。

- ① 「おおぞらシート」の取組や生徒の思いや願いを大切にしたい勉強会等の生活指導を行うことで、生徒が「現在学んでいること」と「自分の将来」とのつながりを考えながら、主体的に学びに向かったり、新しく知識を得る楽しさを感じたり、興味・関心を広げたりして、自身の生活をよりよくしていこうとする姿を引き出す。
- ② 「未来へのスケッチ」と「おおぞらシート」を活用して学部や家庭と三者で生徒の学びをつなぐことで、様々な働き方や暮らし方があることを理解して具体的な目標をもち、目標実現に向けて行動したり、それを振り返って改善したりする生徒の姿を目指し、シートの改善や活用の工夫を行いながら、学部と連携して作成するシステムを整える。

2 生活指導の実際

(1) キャリアパスポート(未来へのスケッチとおおぞらシート)を活用した生活指導

① 「おおぞらシート」の様式の見直し、改善

これまでの様式は目標設定や、振り返りのスケジュールに合わせた1枚ずつの用紙で、計7枚に記入するものだった。目標達成のために行ったことを確認するには、流れが分かりにくいことから、思い出すことや、イメージすることの多い振り返りに課題があった。学びの履歴を視覚的に分かりやすくするために、内容を精選し、作成する枚数を計3枚に減らして見直した。さらに生徒に応じて写真や図などを多く用いながら記入することにした。また、取組の振り返りに活用するために、生徒と「おおぞらシート」の取組に関して話題にしたことをメモするなどの工夫をした。



② 指導方法の検討（職員ワークショップ）

キャリアパスポート（「未来へのスケッチ」、「おおぞらシート」）を活用した生活指導の検討は、毎月の研究会で実施した職員ワークショップで行った。ペアでの話合いから2グループに分かれて話合いを行い、全体で確認するという流れで進めた。徐々にグループの人数を増やして話し合うことで、それぞれが活発に意見を出すようになった。様々な意見が出るようになったことで話合いが深まり、生徒の気持ちに寄り添った生活指導についてのアイデアが多く出され、指導に反映されるようになった。

【ワークショップで確認したこと（抜粋）】


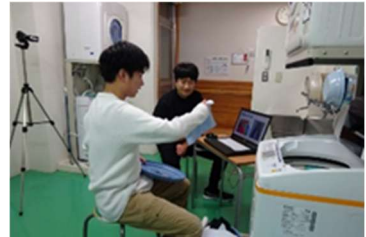

1回目：4月26日（金）	<ul style="list-style-type: none"> ・目標設定までの流れと新しい様式の活用に向けて ・面談と学部連携に向けて
<ul style="list-style-type: none"> ・前向きな気持ちを引き出すために、生徒の思いや願いを肯定的に捉えることが大切である。 ・実生活に結び付かない場合には「何をすれば近付けられる？」等の問いかけをしながら、対話の中で、今行うべきことを探り、確認していく。 例：アイドルになりたい⇒きれいになるためには？→丁寧に顔を洗えるといいね コンサートなどを行うには？→時間に遅れない人だといいね ・言葉にすることが難しい生徒や経験不足により選べない生徒には、本人がイメージや選択ができるように、思いや願いから、実行できる選択肢を提示する。 ・職員間で思いや願いの捉え方、生徒が自分のこととして納得して取り組めるような話合いの進め方を日頃から話題にし、共有しながら進めていけるとよい。 	
2回目：5月24日（金）	<ul style="list-style-type: none"> ・目標設定の様子 ・面談と学部連携の実際
<ul style="list-style-type: none"> ・目標設定に向けては、1枚にまとめて記入するようにしたことで、具体化してまとめられた。生徒は自分の思いを言葉にできていた。 ・新しい様式は、余白を活用しての思考のプロセスを記入や時系列で確認ができた。 ・目標設定の前に「生徒の思いを受け止める」ことを職員間で確認したことで、生徒の気持ちに寄り添った話合いをもてた。 ・高3の生徒は「未来へのスケッチ」を基に話し合った。生徒が寄宿舎でできるようになりたいことをイメージしやすく、話合いが進めやすかった。 ・未来へのスケッチ作成のスケジュールは学年でばらつきがあった。情報共有、連携の仕方を確認しながら探っていきたい。 	
3回目：6月23日（金）	<ul style="list-style-type: none"> ・おおぞらシートを活用した生活指導
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒と振り返りを行う時間の確保が課題→改善案 担当職員が勤務や生徒の行事を見ながら日程を計画し、打ち合わせで伝え、日程を職員間で共有する。 日頃の会話でも目標に関連する話題については付箋にメモをして「おおぞらシート」に貼り、振り返りの際の参考にする。 ・生徒のモチベーションアップに向けて 目標達成に向けて行うことを始めに確認し、記入してから進める。 生徒主体で目標、実態に応じて掲示する。 	
4日目：7月24日（金）	<ul style="list-style-type: none"> ・学部との連携
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の生活場面での課題や目標設定に向けて、事前にすり合わせが必要だった。 ・生徒の思いや願いから考えた目標が、生徒の実際の生活に結び付きにくいことがあった。 ・課題達成に向けた目標、生活を豊かにする目標など、目標設定の仕方に職員間で捉え方の違いがあった。 	



(2) 生徒の思いや願いを大切にしたい勉強会の計画・実践・振り返り

勉強会の実施計画を立てる際、事前のアンケートから、生徒が興味をもっていること、知りたいと思っていることを聞き取った。体験的な活動、分かりやすく視覚的に工夫した教材の活用、生徒が手本を見せたり、教え合ったりする場面を設定するなど、意欲を引き出す工夫をした。前期は全員が参加する形としたが、後期は選択制にして生徒が自分で選んだ勉強会に参加した。後期は小グループで行ったことで、個別のニーズや生徒の興味・関心に基づいた具体的な内容となった。また、生徒の言葉や反応を見て、やりとりをしながら進められた。

勉強会の実施計画等の様式を整え、ねらいや指導内容について職員間で共有できるようにした。また、勉強会の様子を動画で見合うようにしたり、評価シートの評価項目を見直したりしたことで具体的な評価から改善につなげられるようにした。

今年度後期に実施した勉強会は次のとおりである。

肌の手入れ・整髪勉強会	11月27日(水)
<p>勉強会の内容：肌の水分量の確認、洗顔、整髪の仕方を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> 器具を使って、肌の水分量を確認した。 動画を見せ、洗顔や整髪の仕方とポイントを伝えた。 <p>生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 顔の洗い方は知っていると話すが、肌の水分量を知り、洗顔フォームの泡立て方に興味を持っていた。 職員がモデルの動画を見ながら、洗顔するイメージをもって手を動かしていた。 <p>変容：これまで勉強会に参加しなかった生徒が参加した。勉強会后、使用している保湿剤について職員に尋ねたり、継続して取り組んだりする様子が見られた。</p>	 <p>【器具を使って肌の水分量をチェック】</p>
洗濯勉強会	11月27日(水)
<p>勉強会の内容：洗濯物の量に合わせた洗剤の量と洗濯ネットの使い方を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> 「水量に合わせた洗剤の分量」について、スライドや実物で示し、自分の洗濯物を使って確認した。 洗濯ネットの使い方とメリット、デメリットについてスライドや動画、実物を示して確認した。 <p>生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 洗剤の量と効果の関係について確認すると「多いとすぎに時間がかかる」「(洗剤の)無駄遣いになる」と答える。 スライドに挙げた例と自分の持っている服を対応させて考えることができていた。 <p>変容：洗濯物が多い日は水量を多くするなど、考えて調整している様子が見られている。洗濯ネットに入れると、その分汚れを落とす力が弱くなることを理解し、汚れが目立つ白い靴下はネットに入れないといった、工夫ができていた。</p>	 <p>【洗濯場で実際の洗濯物を使って洗濯の状況を確認】</p> 
整理整頓勉強会	12月4日(水)
<p>勉強会の内容：互いの衣類の整理と収納の仕方を話し合う</p> <ul style="list-style-type: none"> 事前に記入したワークシートを基に収納の仕方を教え合った。 実際に収納グッズを見せたり、引出を再現した物を準備したりした。 	

<p>生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> これまで勉強会の参加には消極的だったが、自分から質問や発言するなど積極的に参加する様子が見られていた。 実際に収納グッズや引出しを再現した物に触れることで話合いが深まった。 <p>変容：紹介した収納グッズを参考に、段ボールで仕切りを作り、収納するなど、学んだことを生活に生かす様子がみられた。</p>	 <p>【それぞれ工夫していることを友達に伝える】</p>
<p>食事・健康の勉強会</p>	<p>12月11日（水）</p>
<p>勉強会の内容：体を作る栄養素、心と栄養の関係について知り、バランスのよい献立を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> アニメや動画を使って栄養素の説明とクイズをした。 パワーポイントと動画で体と心の健康に良い栄養素について確認した。アプリを使用して、栄養バランスのとれた献立を考えた。 <p>生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> 何度もチェックして丁度よいバランスになるように試していた。 好きな物だけを選ぶとカロリーが高くなることや、ビタミンなどの栄養素が少ないことを職員と確認した。 <p>変容：実際には食べないかもしれないが、バランスを良くするために牛乳や魚など苦手な物を選ぶ様子があった。</p>	 <p>【アプリを使って、栄養のバランスを考えながら献立を考案】</p>

(3) 「未来へのスケッチ」と「おおぞらシート」を活用した連携

学部と「未来へのスケッチ」と「おおぞらシート」を互いに確認したり、コメントのやりとりをしたりした。また面談や話合いの機会を増やすなど、つながりをもった指導ができた。



【高等部3年生の現場実習中の様子とおおぞらシート】

高等部3年生は、卒業後の生活に具体的なイメージをもっている生徒が多く、「未来へのスケッチ」の目標を4月に記入していたため、「おおぞらシート」を記入する際の参考になった。他の学年は、なりたい自分をイメージすることが難しく、目標設定に時間を要したため、学年によりスケジュールが異なることがあった。

高等部3年生の現場実習に向けた連携した指導は次のとおりである。

【高等部3年生 現場実習中の取組】

名前: ことり 翔
 前編 朝ご飯を食べる。
スタート → **ゴール**
 <4月> トイレに時間がかかっていたので、食事の時間に間に合えなかった。
 <6月> 朝早く起きて、身したくと朝ご飯をすすめることができた。
 <7月> 実習で朝起きて、行くのが遅かった。朝ご飯の準備も、バスをつかっても間に合いません。(1週間)
 やることリスト
 □①実習のお礼状(下書き) → 今進中
 □②ゆりフェスポスター → 今進中
 □③音楽部発表練習 → 今進中
 □④ゆりフェス前日準備 → 終わったら口にチェックする
 できたこと 朝ご飯の時間に間に合わせて食べることで、登校時間通りに行くことができた。髪も結ぶことができた。

<p>実 態</p>	<ul style="list-style-type: none"> こだわりが強く時間に遅れがちで、家庭の生活リズムが整わず、遅刻や欠席が多かったことで、高等部2年の後半より入舎している。自宅からの現場実習では、遅刻や欠勤が多くなり、進路において課題だった。
<p>未来へのスケッチ</p>	<p>朝・昼・夕食入浴を決められた時間内で済ませる</p>
<p>おおぞらシート</p>	<p>朝ご飯を食べる（ご飯の時間に間に合うように準備する）</p>

個別の生活指導計画	朝食に間に合うように身支度を整える
現場実習中の目標	寄宿舎から遅れないで通勤する
学部との連携した指導	<ul style="list-style-type: none"> ・準備の手順や時間の事前確認 ・関わり方の共有：最終時間の提示→声を掛けずに待つ ・できたこと、良かったことを家庭へ伝える
生徒の変容	<p>・時間を守って出勤できた。気持ちの落ち込みや欠勤がなかった。</p> <p>・見通しをもって行動し、優先順位を考えられるようになった。</p> <p>上記のことから、実習後も時間に遅れることがなくなり、表情良く自信をもって生活する姿が見られるようになった。寄宿舎生活の中で活躍の場面も増えている。現在も卒業後、グループホームの生活を目指し、実習を重ねている。</p>

3 まとめ

(1) 学びたい気持ちを高め、自身の生活をよりよくしようとする姿を目指すために必要なこと

「おおぞらシート」を活用した生活指導に取り組む中で「生徒の思いや願いを肯定的に捉えること」「言葉にすることが難しい生徒や経験不足により選べない生徒には、本人の思いや願いに寄り添った選択肢を提示する」など生徒との対話から目標設定や指導内容の検討を行った。

振り返りの場面では、目標に関連した日常の会話をメモにとり、生徒との話合いの手掛かりにし進めた。また、写真やイラストを用いて視覚的に分かりやすくしたことで、行ったことや次に行うこと、途中経過の確認がスムーズになり、生徒主体で話合いをもつことができるようになった。話合いを重ねることで目標達成のために行うことを具体的にイメージできる生徒が増え、自分事として前向きに目標に取り組む姿につながった。また、「何をしたか」「何ができるようになった」を自分の言葉で伝えることができる生徒が増えた。

勉強会は、全員が参加する形で実施されることが多かったが、後期より勉強会の内容を提示し、生徒が選択して参加するもち方にしたことにより、前期までは参加しなかった生徒が参加したり、積極的に向かう姿が見られたりするようになった。少人数で行ったことにより個別のニーズや生徒の興味・関心に基づいた具体的な内容となった。生徒の言葉や反応を見て、やりとりをしながら進めたことで深い学びにつながった。また、覚えたことを生徒同士で教え合ったり、学び合ったりする様子が見られるようになった。

「おおぞらシート」の取組や勉強会をきっかけにして主体的に取り組んだり、工夫したりする姿が多く見受けられ、学んだことを生活に生かす生徒が増えた。生徒の思いに寄り添った生活指導を行ったことで、勉強会で学んだことが個々の目標達成につながるなど、個別の生活指導と日常の生活指導グループを中心とした生活指導から、生徒が個で身に付けた力を生かして主体的に取り組む姿を引き出すことができた。



【おおぞらシートで目標にした風呂掃除に取り組む】



【勉強会後に段ボールで仕切りを作って衣類整理】

(2) 「未来へのスケッチ」と「おおぞらシート」の活用と生活指導

生徒の思いや願いに寄り添いながら、目標設定や指導内容の検討を行った。思いに寄り添うことで、生徒が主体的に取り組むことが分かり、できることは自分でする生徒の姿を見守ったり、工夫し、考えて行動することを認めたりして、次への意欲につなげるようになった。

指導グループを中心とした生活指導では、勉強会について職員間で計画・記録・評価と指導の流れを明確にすることで、日々の指導とつなげた継続した指導ができるようになった。また、職員間での話し合いが充実し、チームで計画実施する体制に整えることができた。勉強会の様子は動画で見合うようにし、評価シートを活用して改善につなげた。これまでの評価項目は達成できたことから計画実施に向けた観点として活用し、次年度は、指導の経過や生徒の変容を評価できるようにして生徒が継続して取り組めるように改善していきたいと考える。「未来へのスケッチ」と「おおぞらシート」の活用や生徒の思いに寄り添った生活指導により、互いに学び合い成長できる場面や同年代の友達との集団生活の良さがみられる場面など、寄宿舎の良さに着目しながら、家庭生活や社会生活に生かせる様々な生活経験を提供できた。様々な生活経験は、生徒の主体的な姿や深い学びにつながった。今年度、実施したスタイルで生活指導を継続していきたいと考えている。

学部とは「未来へのスケッチ」と「おおぞらシート」の共有や面談の回数を増やすなど、つながりをもった指導ができた。進める中で生徒の生活の様子と「願いや思い」の差を確認し、目標設定や日々の指導場面で擦り合わせを行った。しかし、話し合いの機会を設定することは難しく、それぞれが工夫して話す時間を持つ必要があった。今後はアプリを活用するなどして、生徒の取り組んだことやできるようになったことをタイムリーに共有し、生徒が認められる場面を増やすことで、主体的に学びに向かえるように連携した指導を探していきたい。

(5) 今後に向けて

今年度は、「おおぞらシート」を活用した個別の生活指導や指導グループを中心とした生活指導から興味をもって行ったり、学んだことを生活の中に取り入れたりするなど、生徒が主体的に取り組む姿を引き出すことができた。その積み重ねから「自分の生活をよりよくする姿勢」につながれたらと考える。

各学部とは、「未来へのスケッチ」と「おおぞらシート」を共有のツールとして使うことで、つながりをもった指導ができた。今後は「未来へのスケッチ」の「暮らす」に寄宿舎としてどのようにつながっていくかを各学部と検討し、生徒が経験したことやできるようになったことを、学部や保護者とタイムリーに共有して、生徒の意欲を引き出し、生徒一人一人に応じた生活に生かせる生活力を育てていきたい。話し合いの場をなかなか確保できないというデメリットはアプリを活用するなどして解決していくが、生徒についての日常的な情報交換など、これまで行ってきた職員間のコミュニケーションも大切にしながら保護者や学部との連携を図りたい。

また、生徒が自分で選択する場面を多くしたことにより、興味をもって行ったり、学んだことを生活の中に取り入れたりする姿につながった。このことから、生徒の思いに寄り添うことで、生徒の意欲の高まりにつながるということが分かった。研究の取組をとおして、自分の言葉で伝えたり、質問をしたりするようになり、生活の様々な場面や自治会活動等において、生徒同士で話し合う場面が多く見られるなど自分達の生活の場が、よりよくなるように考えて自分で行動する姿が見られるようになってきた。

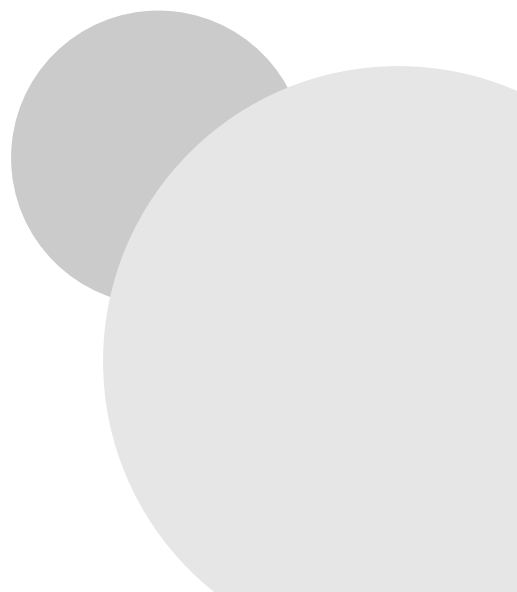
キャリアパスポートの活用と学部連携により、生徒自身が寄宿舎生活の中で生活に必要な技術や周囲との適切な関わり方を身に付けられる生活指導を目指したい。また今後想定される多様な入舎への対応や寄宿舎機能を効果的に活用した指導につなげていくことができればと考える。



【部屋会で出した要望に答えてもらっている様子】



第3章 研究のまとめ



研究のまとめ

(1) 「未来へのスケッチ」の活用

今年度、各学部が工夫をして「未来へのスケッチ」の活用を進めた。各学部の成果については以下のとおりである。

<小学部>

児童の好きなことや得意なことを教師が見取り、付箋紙に記入して視覚化することで、教師間で児童一人ひとりの変容や成長を共有することができ、児童の興味・関心や思いや願いに沿った授業を展開することにつながった。

<中学部>

生徒との面談を定期的に行い、月ごとの目標の振り返りや評価を繰り返すことで生徒の思いや願いを引き出し、「次は〇〇を頑張りたい」「〇〇をやりたい」などという前向きな生徒の考え方につながった。教師が生徒との対話を重視することで、生徒の思いや願いを引き出したり、生徒の振り返りに対して教師が認める言葉を掛けたりすることで、生徒自身の達成感や自己肯定感を高めることができた。

<高等部>

自己理解ができていない、自己肯定感が低いなどの生徒が多かったが、生徒の自己理解につながるような学習を展開したり、仲間と協力したりして認められる実践を積み重ねることで、適切な自己理解ができるようになってきた。また、「未来へのスケッチ」の中の卒業後の目指す姿と・夢、学校生活や作業学習、家庭での目標、そのために何をするか記入する際に目標の設定の仕方を3つの目標(状態目標・行動目標・結果目標)にするようにしたことで、目標がより具体的に記入できるようになった。

このように、各学部で「未来へのスケッチ」を授業づくりに生かすような取組をしたことで、児童生徒の思いや願いを聞き取り、単元構想や授業内容を子どもの思いや願いを基点として考えられるようになってきた。その際に、年3回行われる「授業デザインミーティング」を全校縦割りで行うことで他学部の視点を取り入れられること、授業の構想を多様な視点から考えられることは貴重な機会であり、今後も授業デザインミーティングは継続していきたい。

保護者との連携、情報共有という観点から保護者に「未来へのスケッチ」作成のリーフレットを作成し、意義や面談のスケジュールを視覚的に示したことで、子どもの成長を共有したり、一緒に将来について考えたりする機会になったと考える。一方で、「未来へのスケッチ」の保護者のコメント欄の記入にばらつきがある、目標の共有が図られていないなどの課題もある。どのように保護者と連携し、一緒に子どもの成長を見守り、支援をしていくか考えていく必要がある。

児童生徒の思いや願い、目標や頑張りたいことを児童生徒、教員、保護者などと共有しているか

12月  3.3

0.28ポイントUP

6月  3.02

【教員への授業づくりアンケートから】

※評価基準 4：よくしている 3：ときどきしている

2：あまりしていない 1：ほとんどしていない

(2) 学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組むための授業づくり

今年度、「学びたい気持ちを高め、夢中になって取り組む」ための授業づくりをしてきた。各学部での授業づくりのポイントは以下のとおりである。

<小学部>

自分の思いや願いをうまく表現できない児童が多いため、教師が児童の興味・関心の高い題材をテーマとして設定した。さらに教科横断的な活動を意図的に設定することで児童の題材への理

解が深まり、夢中になって取り組む姿につながった。また、繰り返しの活動で見通しをもたせること、一人一人に役割を与えることで自信をもち、友達と協力して活動する姿を引き出すことができた。

< 中学部 >

生徒と教師との対話を通して、「未来へのスケッチ」の目標を考えたり振り返ったりすることで「次は〇〇をしたい」「もっと〇〇したい」などと生徒が考えたことを記入するようになり、授業の中に取り入れることが多くなった。また、職業・家庭科と生活単元学習の授業内容を関連させながら授業を展開することで、効果的な指導につながった。

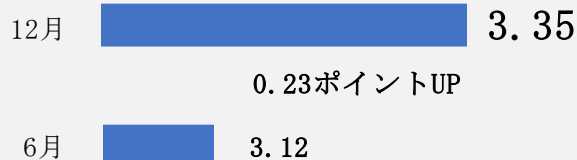
< 高等部 >

生徒自身の自己理解が不十分であると感じ、「自己理解の木」を作成し、生徒が自分自身を

客観的に理解する取組をした。様々な活動を経験することで前向きな気持ちやもっと学ぼうとする意欲につながった。また、生徒が「未来へのスケッチ」に記述した思いや願いを取り入れた学習を展開し、めあてを生徒との対話から引き出す工夫をすることで、課題を自分事として捉えて、主体的に解決しようとする姿につながることができた。

このように、児童生徒の思いや願いを聞き取り、児童生徒が中心の授業を展開することで、子どもが主体的に学ぶ姿勢、さらに学びたいと思う姿勢につながると考える。教師側の意識も、教師主導ではなく、子どもと一緒に授業をつくる、教師が一方向的に教えるのではなく、子ども主体の学びを支える意識で支援をすることができるようになってきたと考える。

子どもの様子を見取り、子どもの思いや願いの聞き取り、実態把握などから単元計画や指導に反映している



【教員への授業づくりアンケートから】

※評価基準 4：よくしている 3：ときどきしている
2：あまりしていない 1：ほとんどしていない

(3) 今後に向けて

「未来へのスケッチ」を活用した取組を通して、児童生徒の思いや願いを意識した授業づくりに取り組んだ。今年度、「未来へのスケッチ」を授業づくりに活用してみて、学校として「未来へのスケッチ」の活用を考えたときに様々な問題点があり、それらを改善し、システムの構築に向けて取り組んでいくべきことが見えてきた。来年度、「未来へのスケッチ」のシステムを構築するために変更や試行することは以下のとおりである。

- ・個別の教育支援計画の本人・保護者の願いと「未来へのスケッチ」の児童生徒の思いや願い、保護者の願いを共通の願いとして記入をしたい。そのために、教務部と連携して様式を検討する。
- ・年度当初の保護者からの聞き取り用紙の内容や項目を再検討、保護者との年2回の面談の方法、保護者や子どもの思いや願いの引継ができるように保護者面談や教育資料作成の流れを整理する。
- ・各学部の「未来へのスケッチ」作成の手順や面談の回数などを視覚的にまとめて誰が見ても分かるようにまとめる。
- ・学校として「未来へのスケッチ」のシステム構築が分かる流れを視覚的に示す。
- ・寄宿舎の「おおぞらシート」と「未来へのスケッチ」の内容や情報を共有ができるように情報共有アプリを活用する。
- ・学部によっては評価の時期や回数、生徒との面談の回数を検討し、子ども自身が自分の夢や目標を意識した生活ができるようなサイクルの工夫をする。

以上のように、今後に向けて様々な方策が考えられる。「未来へのスケッチ」をいつ、誰がどのように活用したらいいか分かるように視覚的に整理し、児童生徒の思いや願いを聞き取るための教師の専門性の向上、子どもを中心に授業づくりを進めることを大切にしたい実践につながるようにしていきたい。

<参考文献>

- ・秋田県立ゆり支援学校 研究紀要「研究ゆり」第25号(2024)
- ・秋田県立ゆり支援学校 研究紀要「研究ゆり」第24号(2023)
- ・秋田大学教育文化学部附属特別支援学校「本人主体の個別の教育支援計画(私の応援計画)を活用した教育課程の編成」研究紀要第44・45集(2018・2019)
- ・「豊かな自己理解を育むキャリア教育」(2014) 小島道生 片岡美華
- ・「知的障害教育における学びをつなぐキャリアデザインー本人の思いや願いを踏まえた深い学びの実現に向けてー」(2021) 菊地一文
- ・「自己理解力をアップ!自分のよさを引き出す33のワーク」(2020) 高山恵子
- ・「人生の木」(2020) 一般社団法人ナラティブ実践共同研究センター NPO 法人 Reconnect
- ・「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」中央教育審議会 文部科学省(2021)
- ・「『キャリア・パスポート』に関するQ&Aについて」 初等中等教育局児童生徒課(2022)
- ・「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」文部科学省(2018)
- ・「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部)」文部科学省(2017)
- ・「特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部)」文部科学省(2017)
- ・「特別支援学校学習指導要領解説 総則編(幼稚部・小学部・中学部)」文部科学省(2017)
- ・「特別支援学校幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領」文部科学省(2017)

秋田県立ゆり支援学校 研究の歩み

※平成27年度まで「秋田県立ゆり養護学校」、平成28年度より「秋田県立ゆり支援学校」となる。

号	年度	研究主題
1	平成11年度	「地域に支えられ、地域に開かれた学校を目指して」～新設校への理解を求めて～
2	平成12年度	「地域に支えられ、地域に開かれた学校を目指して」～新設校への理解を求めて～
3	平成13年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」～授業づくりに結びつく個別の指導計画の作成を通して～
4	平成14年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」～授業づくりに結びつく個別の指導計画の作成を通して～
5	平成15年度	「一人一人が生き生きと取り組む授業づくりを目指して」
6	平成16年度	「集団の中で一人一人が生きる授業づくりを目指して」
7	平成17年度	平成17・18年度 秋田県教育委員会委嘱特殊教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた教育課程の在り方に関する実践研究」～一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実を目指して～ ☆校内研究～「集団の中で一人一人が生きる授業づくりを目指して」
8	平成18年度	平成17・18年度 秋田県教育委員会委嘱特殊教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた教育課程の在り方に関する実践研究」～一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実を目指して～
9	平成19年度	平成19・20年度 秋田県教育委員会委嘱特別支援教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた特別支援学校の在り方に関する実践研究」～一人一人のニーズに応じた生き方指導の在り方を探る～
10	平成20年度	平成19・20年度 秋田県教育委員会委嘱特別支援教育実践研究協力校 「障害の多様化に応じた特別支援学校の在り方に関する実践研究」～一人一人のニーズに応じた生き方指導の在り方を探る～

号	年度	研究主題
11	平成21年度	「集団の中で一人一人がのびる授業づくり」～目指す姿を明確にした目標設定と支援の在り方～
12	平成22年度	☆本校 「豊かな生活を送るために～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～」 ☆道川分教室「一人一人が周囲とかかわる力を伸ばすための支援の在り方」
13	平成23年度	☆本校 平成23・24年度 新学習指導要領に基づいた教育課程の編成等に関する実践研究協力校 「豊かな生活を送るために」～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～ ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業の創造を求めて」～児童生徒の主観に迫る確かな実態把握とは～
14	平成24年度	☆本校 平成23・24年度 新学習指導要領に基づいた教育課程の編成等に関する実践研究協力校 「豊かな生活を送るために」～活動する喜びや働く喜びが実感できる授業を目指して～ ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業の創造を求めて」～自発的に活動する姿を育む状況作りとは～
15	平成25年度	☆本校 平成25年度文部科学省委託 特別支援教育に関する実践研究充実事業研究推進校 「自ら考え、自ら活動する児童生徒の育成」～生徒指導の観点を生かした授業づくりと研修の充実を目指して～ ☆道川分教室 「集団の中で個が生きる授業づくりを目指して」～分かりやすい状況を作る4つの観点を生かして～
16	平成26年度	☆本校 平成25年度文部科学省委託 特別支援教育に関する実践研究充実事業研究推進校 「自ら考え、自ら活動する児童生徒の育成」～生徒指導の観点を大切に授業づくりと教育課程の改善を通して～ ☆道川分教室 「コミュニケーションの深まりを目指した授業づくり」～個々のニーズにあった教材・教具の工夫、改善を通して～
17	平成27年度	☆本校 「人と関わる力を高める授業づくり～自分の気持ちや考えを自ら伝える姿を目指して～」 ☆道川分教室「コミュニケーションの深まりを目指した授業づくり～4つの観点を大切に支援の在り方～」
18	平成28年度	☆本校 「児童生徒一人一人の人と関わる力を高めるために～気持ちや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～」 ☆道川分教室 「人との関わりを広げる授業づくり～自分の気持ちを表し、伝える姿を目指して～」
19	平成29年度	☆本校 「児童生徒一人一人の人と関わる力を高めるために～気持ちや考えを伝え合う姿を目指した授業づくり～」 ☆道川分教室 「人との関わりを広げる授業づくり～自分の気持ちを表し、伝える姿を目指して～」
20	平成30年度	☆本校 「主体的に人と関わる力を高めるために～校内資源や地域資源を活用した授業づくりを通して～」 ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり～自立活動における個別学習の指導を通して～」
21	令和元年度	☆本校 「主体的に人と関わる力を高めるために」 ☆道川分教室 「一人一人の教育的ニーズに応じた授業づくり～自立活動における個別学習の指導を通して～」
22	令和2年度	☆本校 「児童生徒による学習評価の充実～各教科の授業づくりを通して～」 ☆道川分教室 「児童生徒による学習評価の充実～自立活動の授業づくりを通して～」
23	令和3年度	☆本校 「児童生徒による学習評価の充実～児童生徒が学びを実感し、学びをつなげる授業づくりを通して～」 ☆道川分教室 「児童生徒による学習評価の充実～自立活動の授業づくりを通して～」
24	令和4年度	「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成
25	令和5年度	「児童生徒が学びをつなぐ」教育課程の編成

令和6年度 研究同人

校 長 近藤 千晴
教 頭 佐々木朋広 齊藤 理香
研究主任 斎藤 明

〈小学部〉

畠山 千恵 長谷川絵美子 長谷山孝志 下村 志穂 今野 瑞恵
佐々木弘美 佐藤 江美 軽部 亜紀 高橋 真紀 横田 千春
佐藤 瑞枝 高橋 健太 鷹島 薫 藤澤 知里 高野 哲
佐々木弘平 佐藤 文音 菅生 剛基 廣田 舞花 菊地 瞳子
佐藤美奈子 佐藤 由生 伊藤ひとみ 矢野 隼人

〈中学部〉

菊地 正紀 高橋 直子 太田 清子 石垣 幸子 板垣 五月
東谷いずみ 高橋真理子 大川 周悦 伊藤 尚子 栗津 綾乃
伊藤 和美 江川 悠介 神田 雄樹 首藤 将大 作左部美帆
荒木 保香 大門真理子 土田 奈緒

〈高等部〉

工藤 思郎 大庭せい子 堀井 千秋 斎藤 仁 佐々木江利子
伊藤 昌子 大友 良江 安藤 一敏 籠山 誠 渡辺美樹子
下村 靖子 加藤 智美 渡會 義信 田中 正之 吉田 卓也
富田 昌裕 田口 幸子 鈴木 梨沙 佐々木あゆみ 小池成生子
板垣里佳子 松橋 智恵 川村 沙織 渡部 典子 田中佑可子
佐藤 美白 石井 真 長谷川善行

〈寄宿舍〉

佐藤菜穂子 豊嶋 新二 富樫 裕子 小澤美和子 朝香由美子
金釜 未幸 川尻恵美子 杉田 真子 西嶋 一就 鹿子澤 奨
佐々木なおみ 工藤 美香 佐々木 恵 佐藤 弘康

秋田県立ゆり支援学校研究紀要「研究ゆり」第26号

印刷・発行 令和7年3月

発行 秋田県立ゆり支援学校

〒015-0885 秋田県由利本荘市水林456-3

TEL 0184-27-2630

FAX 0184-22-8706

本校HP

